

「暗い世界でこそ輝く」

千里聖三一教会 金井 由嗣



あなたがたは、いのちの言葉を堅く持って、彼らの間で星のようにこの世に輝いている。

ピリピ 2・15

教会学校の働きの主要な目的は、「神の民として生きる人」をこの世界に送り出すことではないか。私はそのように考えています。教会の教勢の維持や拡大よりも、それは大事なことです。

今の子どもたちは、情報の洪水の中で育っています。ネットから有益な情報が簡単に得られる反面、不確かな、あるいは有害な情報も一緒に入り込んできます。何が真実で信頼に足ることか、何が人として選ぶべき道なのか、確かな基準を持たないまま、たまたま出会った人や情報源を手掛かりに世界を理解し、生き方を決めていくのです。

このような時代にこそ、子どもたちを育てる

大人には、信頼に足る価値観と世界観を持って彼らを導き、次の時代を託していく責任があります。私たちは、神のこぼれである聖書の中に、そのような確かな基準を見出すことができるのです。

不安定な、不確かな時代に、確かな価値基準を持って生きる人は、それだけで周囲に益をもたらす存在となります。この世の価値観や「空気に」流されず、すべての人に通用する普遍的な真理に生きる人を、それぞれの地域社会に送り出すこと。これこそが真の意味での「宣教」ではないでしょうか。

神の国の価値観を身につけるためには、聖書のこぼれを理解しつつ心に蓄え、それに従って自分を吟味する「習慣」が必要です。一朝一夕で身に付くものではありません。だからこそ、教師と生徒の人格的関係の中で、時間をかけてみことばを学んでいく教会学校の働きが力ギを握るのです。人数や見た目の活発さで教会学校を評価しないようにしたいものです。時間をかけて共にみことばを学んでいく、神の民の人格形成こそが教会学校の大切な働きなのです。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
教師養成講座「キャンプのカウンセリングと個人伝道」	3
教会の歩み	7
預言者	7 / 14
キリストの宣教	9 / 8
カリキュラム	9 / 29
「牧羊者」のご購読・ご利用について	96
おわりに	96

〔凡例〕

1. 原語について：ギリシャ語は〔ギリ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教出版局）、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出版局）、イン：「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校部）、ふ：「ふくいん子どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」（以上、日本児童福音伝道協会）、PW：「プレイズワールド」（リビングブレイズ）

キャンプでのカウンセリングと個人伝道

千里聖三一教会 金井由嗣



一、はじめに

(1) キャンプ・カウンセリングの特徴

バイブルキャンプでのカウンセリングの最大の特徴は、3〜4日間という短期間になされる、ということです。時間をかけて継続的に関係を築いていく教会学校の教師と生徒の関係とは、その点が大きく異なっています。カウンセラーは専門的訓練を受けているわけではありませんし、そこで初めて出会う相手と限られた時間の中で信仰に関する深い関心を共有し、良き導き手となることが期待されているのです。

こう書いてくるときわめて難しい働きであるように思えますが、これらの条件はプラスに評価することもできます。思春期の若者、特にクリスチャンホームで育って来た人は、自

分の教会の牧師やCS教師には、かえって悩みを打ち明けにくい場合がしばしばあります。悩み事を話した後、それまでと同じように接していきけるかどうか、不安に思ってしまうのです。キャンプで出会うスタッフは、信頼できる信仰の先輩であり、しかもキャンプが終われば当分会わなくなります。信仰に関する疑問や悩みを相談するには、格好の相手となり得るのです。

とはいえ、出会ったその日から真剣な話をするなど、普通はあり得ません。ただでさえ相手の目を見て話す事の苦手な世代なのです。「このカウンセラーなら自分の内面を見せても良い、信頼できる相手だ」と認めてもらうことができるか。キャンプでのカウンセリングの成否は、なによりもここにかかってきます。つまり、この「関係作り」こそ、良きカ

ウンセリングのための最初にして最大の課題だといえるでしょう。

(2) キャンプ・カウンセリングの目標

キャンプでのカウンセリングに期待される結果(ゴール)は、一人一人違っています。画一的な結果を求めないように気をつけましょう。思春期のキャンパーが解決を必要とする問題は様々であり、神様のみ言葉が狭義の「霊魂」の問題だけでなくその人の人生のすべての局面に光を照らすものであることを、彼らは経験する必要があります。もちろん、明確な新生の恵みを求めている人には、それに応える必要があります。つまり、個々人の具体的な悩みや問題にみ言葉から光を当てる「みことばに聴くカウンセリング」と、福音を個人的に適用し信仰告白に導く「個人伝道」とは明確に区別される必要があり、そのどちらもキャンプ・カウンセリングの目標であり得るということです。ですから、カウンセラーはまず、キャンパーと一緒にあって「このキャンプでのゴールをどこに求めるべきか」を見定めていく必要があります。

(3) 「聞くカウンセリング」の重要性

以上のことから、キャンプでのカウンセリングにおいてはまず、「答え」ではなく「問い」を見つけていくことに集中する必要があります。目の前のキャンパーが「本当に」必要としているもの、神様が彼(彼女)をこのキャンプに導かれた真の目的は何か。この段階では、キャンパーの言葉に耳を傾け、その人が自覚している問題(悩み)と、その背後にある(しばしば本人も自覚していない)真の問題が見えてくるまで、時間をかけて聞き出す努力が求められます。楽しく遊んでいる中でのほんの一言が重大なヒントを示してくれることもあります。

(4) カウンセラーの役割、立ち位置

キャンパーとの信頼関係には、いろいろな要素が絡んできます。「距離感」を常に意識しておく必要があります。キャンパーと年代の近いスタッフには、安心して話せる、自分を理解してもらえするという安心感があります。この「安心して話せる先輩」の存在は、きわめて大事なものです。牧師やベテランのスタッフにはその種の「近さ」は期待できませんが、聖書の知識や人生経験が豊富、これまでにいろいろな人の悩み

を聞いて対応してきた、という「答えを知っている人」としての信頼感があります。自分の問題点が明確に見えてきたキャンパーにとっては、心強い存在となり得るでしょう。

自分の立ち位置と利点を自覚した上で、足りない点を補う努力を重ねるならば、さらによい関係を築いていくことができます。「年の近い、感覚も近い先輩が、真剣に聖書を学んだ上で質問に答えてくれる」、「自分に遠い存在と思っていたオッサンが同じレベルで本気になって関わってくれる」、こういうホンキでキャンパーたちに向き合う姿勢こそ、本当の信頼感を生み出すのです。

続いて、それぞれの項目について具体的に考えていきます。

二、関係作り

短期間のキャンプでは、スタッフとキャンパーとの信頼関係を築くことが何より大切です。思春期のキャンパーの場合、他人に心を開くことや心理的距離を縮めること自体が難しいことも理解しておきたいものです。

(1) 急がない。

キャンプ期間の短さを思うと、カウンセリングの時間は少しでも多く取りたいと思うものです。語られたメッセージへの応答、み言葉の深い学びと個人的な適用という目標に向けて話を進めたいとも思うでしょう。でも、ちょっと待ってください。個人的に心を開くことのできる関係がないと、単なる「お勉強」に終わってしまいかねません。特にクリスチャンホームの子どもは、聖書の「お勉強」で「正解」を出すことには慣れていきます。堅苦しい分級をさつさと終わらせて友達と遊ぶために先生の話につきあって「正解」を出しておく。自分の問題や内面の悩みは表に出さず、すり抜けてしまう「技術」を、彼らは持ってしまったのです。聖書のメッセージを深く個人的に適用するためには、彼らと個人的に心を開いて話せるようになるための関係作りに十分な時間をかける必要があります。

(2) 「アイス・ブレイク」の努力を(キャンプ全体で、グループで、一対二で)。

互いに心を開くためには、カウンセラー個人ではなくキャンプ全体での取り組みが必要です。最近はキャンプ序盤のプ

ログラムに「アイス・ブレイク」を意識した取り組みが見られることが普通になってきました。その段階でどれだけ心理的な距離感を縮めることができるか。後のカウンセリングの成否は、そこで決まってくると言っても過言ではありません。グループ単位の活動の時間があれば、その中でお互いを知るための努力をしましょう。教師がリードしすぎると、キャンパーの個性や主体性が出てくる機会を失ってしまいます。それぞれの個性を見極めながら、その人に合ったペースでキャンプに「入っていく」ことができるよう、見守りましょう。グループで一緒に何かを達成するプログラムは、特に効果があります。機会を見て個人的に語りかけることも大切です。

(3) 自分からまず心を開く。

オープンな関係を築くためには、まず教師の側が心を開いて近づいていく必要があります。といっても、無遠慮に近づいていくわけではありません。自分の個性、人間性、信仰者としての姿勢を包み隠さず、長所も短所も含めて明かしていくことが望ましいのです。自分がキャンパーのどのような期待に応えられるか、あるいは応えられないか。教師・スタッフとしての「キャラ」が明確に伝わるなら、キャンパーの側でも

そのようなキャラとして接してくれるようになります。

※ある予備校で生徒に人気のある教師について調べた所、「面白くて楽しい」「実力で勝負」「悩みを親身に聞いてくれる」という3タイプの教師像が挙げられたそうです。面白いことに、すべてをバランスよく兼ね備えた教師よりも特定のキャラクターが明確になっている教師の方が生徒から支持されるようです。また受験までの時期や生徒の状況によって、どのタイプに人気が向かうかも変わってきます（河合隼雄『こころの処方箋』新潮文庫）。

(4) 適切な距離感はその人ごと、キャンプのたびごとに違う。

すべてのキャンパーが、教師とのオープンな関係を望んでいるわけではありません。思春期の生徒であればその時期特有の、人に対する警戒感もあります。距離が近くなるとかえって心を閉ざしてしまう場合も少なくありません。教師としては祈って最善を探りつつ、生徒の側で心を開いてくれるのを「待つ」ことが必要です。たとえその時のキャンプで心を開いたカウンセリングができなくても、それを「失敗」と捉える必要はありません。「この先生は無理強いしない」という

信頼感を与えることができれば、それも一つの収穫です。その生徒に次の機会を与えてくださる神様に信頼しましょう。

どの程度の「距離感」が適切かは、一人一人みな違います。年齢差、性差、個人差があります。スタッフとキャンパーが同性か異性か、年齢が近いか遠いかによっても変わります。以前に担当したことのあるキャンパーでも、その時と同じ距離感でよいとは限りません。思春期の生徒は一年で大きく変わるからです。毎回、祈りながら、悩みながら、接していく以外にはありません。過去の「成功体験」に頼ることは、もつとも危険です。むしろ失敗を重ねながらそこから学んでいくことの方が大事かもしれません。良いカウンセラーになるために必要なのは「悩む力」と、悩みつつなお主に信頼する「信じる力」ではないか。そう思われます。

(5) 一人で背負い込まない。

キャンプでのカウンセリングは、スタッフ全体（さらにはキャンパーたちも含めて）の共同作業です。一対一でカウンセリングを担当しているときでも、決して個人プレーではないのです。さらに言えば、クリスチャンのキャンプは「キリストの体なる教会」のわざです。自分一人で完結させる必要

はないし、完結すべきでもないということを覚えておきましょう。一回のキャンプで望ましい結果が出なくても、教会を通して神様がその人に関わり続けてくださいます。自分の手に負えない問題があれば、適切な誰かに橋渡しすることも必要です。

三、「聞く」カウンセリング

キャンプでのカウンセリングに期待される結果（ゴール）は、一人一人違っています。画一的な結果を求めないように気をつけましょう。カウンセラーはまず、キャンパーと一緒に「このキャンプでのゴールをどこに求めるべきか」を見定めていく必要があります。そのためにまず必要なのは、彼らの声に耳を傾けることです。

(1) 「聞く」ための前提（参照・デイビッド・アウグス

バーガー『親身に聞く』すぐ書房）

①あなたと私は同じ（理解の土台）。

話を聞いて理解するためには、話し手と聞き手が何かを「共有」していることが必要です。まずお互いの共通点を見つけ

るように努めましょう。音楽、アニメ、スポーツ、好きな食べ物、ファッションなど。聖書や信仰に直接関係なくても、あまり高尚な話題でなくても構いません。同じレベルで語り合える話題を通して、「話す、聞く」という会話のキャッチボールをすることが大事なのです。昔流行したもののリバイバルなど世代が違っても意外な接点が存在する場合がありますが、どうしても接点が見つからなければ今の若者文化について彼らから「教えてもらおう」ことにしましょう。「教師―生徒」という関係が逆転すること、一気に話しやすくなる場合もあります。

②あなたと私は違う（理解の努力）

話を聞くことに意味があるのは、そこに聞き手にとっての「新しい情報」が含まれているからです。お互いが「違う」ということを理解しておくことも大事です。自分の経験で相手の話を判断することには注意が必要です。百%同じ経験など人間には存在しないのに、自分の経験の範囲で「理解」したつもりになってしまうからです。キャンパーの話に耳を傾けることで、その人の新しい一面を発見し、その発見を喜ぶ。それは教師自身の喜びであると同時に、「この人は私に関心を持って受け入れてくれる」とのメッセージを発信することに

もなります。自分の常識と違う事柄についても、いきなり否定するのではなく「なぜこの人はこのように考えるのか」を理解し、その人自身を受け入れることが必要です。

（2）心得ておくべきこと

①環境への配慮

他の人に話の内容を聞かれない、閉じた空間にしない、暑すぎない、寒すぎない、明るすぎない、暗すぎない。リラックスして、かつ集中して会話するためには、こうしたことへの配慮が必要です。緊張している相手には「逃げ場」を用意しておくことも時に必要です。

②最後まで聞く。批判しない。答を用意しない。

相手を本当に理解するためには、話を最後までしっかりと聞くことが必要です。多くの場合、私たちは聞いている途中で先の展開を予想しています。教師の立場であれば、つい「答」を考えながら聞いてしまします。けれどもその場合、自分が「答」を見つけたと思った後は、話を聞いているつもりでも本当には聞いていないのです。あるいは、自分が用意した「答」に合わせて相手の話を理解していたりします。それは本当に相手を理解するために「聞く」ことにはなりません。否定的

な反応（批判）の場合はなおさらです。相手の話の一部に対して批判を抱いた瞬間から、「批判を伝えること」に関心が集中してしまい、その先の話を聞けなくなってしまうのです。相手が話し終えるまで「答」を出さないようにするには、それなりの自覚と努力が必要です。

③「聞きっぱなし」にはしない。

相手の話に関心を持つていることを示すことは、話し手のモチベーションを持続させる上で大事なことです。適切な短い応答（相づち、うなずきなど）を示す、話の節目で確認のために短い質問を投げかけるといったことは、話し手との良い関係を維持し、自分自身も集中力を高めるための良い方法です。

④身体的「サイン」に気をつける。

話はもちろん「耳」で聞きますが、むしろ「全身で聞く」姿勢を持つていたいものです。話し手の側も本当に聞いてもらいたい時は、口だけではなく全身がそのことに集中しているものです。逆に言えば、言葉での会話に表現されない様々な感情が、身体動作に表れてきます。「早く終わらせて遊びに行きたいなあ」とか、「この人にどこまで話して良いのかな」とか。にこやかに楽しそうに話しているのによく見ると手を

固く握りしめている、といったケースさえあります。こうしたサインに気を配ることで、その人が本当に話したいこと、聞いてほしいことを引き出せる場合もあります。

（3）解決への道

何かの問題についての相談の場合、問題となっている事柄についてもっとも多くの情報を持つているのは相談者自身です。当たり前のことですが、しばしば見落とされていることでもあります。カウンセラーはとかく「答」を見つけ出そうとしがちですが、実は相談者自身がすでに答を用意している場合が多いのです。最初からそれを自覚している人の場合はその答を肯定してもらいたかったり評価してもらいたかったりするのですが、自分が答を出しかかっているのにそのことに気づいていない、というケースもしばしばあります。その時は、本人がそれに気づくまで聞き続けることがカウンセラーの役割になります。状況の把握や解決の可能性について適切な質問を投げかけることができれば、有効な助けとなるでしょう。

相談者が自分で答を見つけれない場合も、もちろんあります。また自分で答を見つけているけれども自信がなかった

り、それが明らかな誤りとカウンセラーの目に映ってくる場合もあります。その場合、「正解」を言っただけだと思ってしまうでしょう（特に牧師には、その傾向が強いかもしれません）。けれどもその場合も、相談者が自分で見つけて納得した答でなければ心には届かない、もしくは実行に至らないものです。カウンセラーはすぐに答を出すよりも、一緒に答を求めて祈り、考えることに徹した方が良さそうです。相談者と一緒に、その時点で「わかっていないこと」と「わかっていないこと」を明確にする、話の内容を紙に書いてみる、状況を理解できる第三者の意見を聞く、などの手助けの方法があります。クリスチャンとして、み言葉の中に解決があることを信じて共にみ言葉に聞くことも大事です。

四、み言葉によるカウンセリング

私たちは「聖書は誤りのない神の言であり、信仰と生活の基準です」と信じ告白しています。聖書の教えは狭い意味での「靈魂」の問題だけではなく、人生のすべての領域に関わる「神の言」だと信じています。思春期のキャンパーが直面している問題は、実に様々です。友達との関係、恋愛や性の悩み、

勉強、進路、自分の性格や能力、家庭関係、等々。これらの問題にみ言葉から光を当てられ、取るべき態度が明確にされることはバイブル・キャンプの大切な目的の一つでしょう。

（一）聖書の中に答があることを信じ、聖書の導きを祈り求める

カウンセリングにあたっては、カウンセラー自身が聖書の中に答があることを信じていなければならないのは当然です。ただし、強引な解釈やこじつけは禁物です。聖書が書かれた時代背景や文化は現代と遠く離れているのですから、直接適用できるケースは少ないでしょう。大切なのは、聖書の価値観や原則を正しく学んで、それを具体的な問題に適用していくことです。聖書の導きを祈り求めながら、相談者が納得する仕方のみ言葉を解釈し、状況に適用していくようにしましょう。その際、相談者の聖書知識に配慮しましょう。できるだけ自分で適切なみ言葉を見つけ出すことが望ましいのですが、聖書の箇所を示すなど、フォローは必要です。

（二）証しの有効性

カウンセラー自身がよく似た事例を経験している場合、自

分がみ言葉に教えられた証しを伝えることも有効です。ただし、「説教」にならないよう気をつけましょう。また「100%同じ経験はない」ことも覚えておきましょう。あくまでも相談者自身が、自分の問題にみ言葉を当てはめて理解することが目標です。

(3) すぐに答が見つからない場合

特定の問題についての答が、常にみ言葉から見つかるとは限りません。その場合、「見つかるまでは」と長時間探し続けることは避けた方がよいでしょう。すぐに見つからなくても良いから「聖書を読み続けて、祈っていきましょう」と励ますようにしましょう。み言葉を読み続け、祈り続けていれば、神様がもつとも良い時に示してくださるものです。

(4) 「み言葉によるカウンセリング」と「個人伝道」の違い

人生の問題にみ言葉による答を見いだすことは聖書が教える「救い」の一部ですが、「救い」そのものではありません。神の言である聖書が人生の道しるべとして語り続けるためには、私たちと神様との関係が根本的に確立していることが必

要です。具体的・個別の問題にとどまらず、相談者自身がより根源的な問題（罪、神との関係の破れ）に気づいてその解決を求めている場合、必要なのは救いのメッセージを個人的に適用して悔い改めと信仰告白に至らせる「個人伝道」です。

五、個人伝道

個人伝道についてはウィルクス師の「救霊の動力」やR・A・トーラー「個人伝道法」などの優れた手引きがありますので、ご参照ください。

(1) 個人伝道の心得

① 個人伝道は、救われる必要を自覚した魂のための、愛の奉仕です。強制的、脅迫的に行うことがあってはなりません（救われなかったら地獄行き」など）。またカウンセラーの達成感とも無関係です。

② 人が救われて神の子となることは神様ご自身の願いであり、そこに聖霊が働いてくださることを認めるべきです。

③ 新生したクリスチャンであればだれでも、個人伝道ができます。聖霊の導きを祈り求めつつ、慎重に進めましょう。

人間的方法に頼ることは危険です。

- ④カウンセラーと一対一の信仰告白がゴールではありません。教会での公の信仰告白（洗礼）につなげることが必要です。

(2) 救いに必要な教理とは

① 神について

聖書が教える唯一の神様の存在、神様が万物の創造者であること、愛であること。クリスチャンホームの子どもであれば、知識としては知っていることでしょうが、実践において神様を唯一絶対のお方としてきたかどうか問われます。ノンクリスチャンの背景から来た人であれば、まず唯一の神様の存在から教える必要があります。

② 人間について

神のかたちに造られた尊い存在であること、神の愛に応答できる霊的存在であること。現代の若者は自分に自信が持てず、否定的な感情にとらわれている人が多いようです。罪を示す前に、まず自分が神様から見ていかに尊い存在であるかを教えられる必要が、彼らにはあります。

③ 罪について

神に背を向ける根源的な罪と、具体的な罪の両面が聖書から示される必要があります。「罪意識」や「自責の念」がイコール聖書の教える罪、ではないことにも注意が必要です。律法（十戒）から何が罪であるか（罪の定義）、山上の説教から内心の罪について光を当てることがよいでしょう。自分の罪深い性質にもみ言葉の光を当てられる必要があります（J・I・パッカー『伝道と神の主権』）。

④ イエス・キリストについて

受肉した神の子、神の愛を表した方として。また十字架のあがない、復活、救い主としての権威について。教会に通っている人であれば知識としては知っていることですが、「私の救い主」として個人的に適用することが重要です。

⑤ 救いについて

救いの中心は「神との関係の回復」です。それは「永遠のいのち」と言い換えることもできます。そのために十字架による信じる者への罪の赦し、義認、新生の恵みがあります。

※知識として知っている人には個人的適用が、まだよく知らない人には聖書を開いて順番に教えることが必要です。キャンプでのカウンセリングの場合、大事な部分は

メッセージで語られているので、それを理解できているかを確認することになります。

(3) 個人的適用のための導き

①信じることと告白すること

心で信じることと口で告白することの両方が必要です。「信じる」とは知的同意以上のことで、教えられたメッセージに自分自身を委ねることを意味します。また「告白」には「罪の告白」と「信仰の告白」があります。「信仰の告白」については、洗礼式における公の告白が最も重要です。「罪の告白」は何よりも神様に対してなされるものですが、真実な告白を助けるためにカウンセラーの前で具体的な罪の告白をすることが必要な場合もあります。ただし、カウンセラーは秘密を厳守しなければなりません。また具体的に誰かに損害を与えた罪の場合、その相手にも告白して赦しを乞う、または償いをする必要がある場合もあります。このこと自体は救い（義認）の必要条件ではありませんが、信仰生活が勝利に満ちたものとなるためにはなされた方がよいのです。

②み言葉による救いの保証について

聖書の信仰は感情ではなく、神様のみ言葉が真実だと認め

ることです。新生の経験においては当然大きな喜びの感情が伴いますが、感情に救いの根拠を置く信仰は不安定です。み言葉に根拠をおいて信じ続けるように励ましと勧めが必要です。

③洗礼について

個人伝道はその場で完結するものではなく、洗礼において信仰を告白し、キリストの体に連なることが必要です。ただし、洗礼の時期や踏むべき手順についてはカウンセラーではなく所属教会の牧師の指導に従うべきです。未成年の場合は家族との関係もあり、また受洗後の信仰生活が続くようにとの配慮も必要です。カウンセラーの立場からは、牧師にできるだけ早く報告し指導を受けるように勧めることが最善でしょう。

六、カウンセリングにあたっての注意事項

(1) カウンセラーのタイプと役割。

①ファースト・カウンセラー（筆者の造語です。他に適切な呼び方があれば、お教えください。）

キャンプには、参加者より少し年長の、卒業後数年の先輩

たちがスタッフとして加わっていることも多いでしょう。彼らの多く(すべてではなく)は信仰的にも人間的にも未成熟で、カウンセラーとしての期待は持たれていなかったり、本人も「カウンセリングとか無理」と思っていたりします。しかし、思春期のキャンパーにとっては彼らの存在がきわめて重要であると考えます。自分たちに近い感覚を持ち、話しやすく、自分たちの悩みや弱さを理解して共感してくれる良き先輩。しかも数年前まではキャンパーとして参加し、カウンセリングを受けて解決を見出し、今は青年クリスチャンとして歩み、奉仕者としてキャンプに参加している彼らに、近い将来の信仰者としての自分を見ることができるようで、本格的なカウンセリングに入る前段階として、これらの先輩と気軽なコミュニケーションを持つことは、その先にあるカウンセリングへの良き導入となります。もちろんこれらの先輩たちが良き訓練を受けて本格的なキャンプ・カウンセリングに携わることができれば、キャンパーにとって理想のカウンセラーとなります。

②聖書のカウンセラー

み言葉の知識と理解に基づいて、キャンパーの抱える問題に光を与えることができる人です。牧師やベテランのスタッ

フに期待される役割です。聖書の知識だけでなく人生経験や常識、バランス感覚も求められます。その一方、若いキャンパーたちの感覚から「ずれて」しまわないよう、また彼らが望まないものを自分の尺度で強いることがないよう、注意と自制も必要です。

③専門的カウンセラー

キャンパーが解決を求める問題の中には、特別な専門的知識や経験が必要なものもあります。家庭の問題やいじめ、心の傷、進路選択の悩みなどが例としてあげられるでしょう。性に関する事柄や薬物の問題などは、今の若者の実情を知らない適切な対処ができないかもしれません。キャンプスタッフの中にこうした問題に対応できる人材がいる場合にはその人が対応することになりますが、その場に適当な専門家がいない場合は後で対応することになります。教団単位、あるいは超教派で、そうした専門家にコンタクトを取るためのネットワークがあればと願われます。

④個人伝道者

基本的に新生したクリスチャンは誰でも個人伝道ができませんし、神様がするように導かれる場合があります。とはいえ、魂の永遠に関わる大切な事柄ですから、備えなしに事に当た

るのは、特別な導きがある場合以外は避けたいものです。教職者は神学教育の中で個人伝道の訓練を受け、また教会での奉仕の中で何度も経験していますから、自信がなければ教職者に委ねる方が良いかもしれません。

(2) 自分が扱える問題と扱えない問題を見分け、扱えない問題については適切な人に委ねる。

特に専門的知識の必要な深刻な問題（心の傷や病、性の問題、家庭問題、金銭問題、深刻な罪など）は、不用意に扱うことでその人の人生を狂わせる危険があります。緊急避難として自分が関わらざるを得ないケースもあり得ますが、できるだけ自分の扱えない問題については他の人に委ねるという節度を持つておきたいものです。

(3) 相談者の望まない扱いをしな

カウンセラーが、自分の価値判断に立って「あなたはこうなるべき」とキャンペーンに押しつけることは、百害あって一利なしです。強引な個人伝道や答の押しつけは逆効果になります。

(4) カウンセラー一人で完結させない。必ず教会に魂を委ねる。

日常生活から離れた場所で一対一のカウンセリングをすることには、キャンペーンがカウンセラーとの関係に依存し、所属教会よりもカウンセラー個人に結びつくようになる危険が伴います。現代はキャンペーンの後メールなどで連絡を取り合うことが可能な分、その危険も増していると言えるでしょう。クリスチャンは教会に結びつけられ、教会で育てられることにより個人的信仰の偏りから守られます。キャンペーンが終われば魂の養いは所属教会に委ねるべきです。もちろん、主にある兄弟姉妹としての対等の交わりを持つていけるなら、それは望ましいことです。

(5) 秘密は厳守する

キャンペーンでのカウンセラーは職業ではありませんが、道義上の守秘義務を負っていると考えるべきです。相談したこと誰かに話される可能性があったら、決して真剣な相談は成り立たないでしょう。ただし、カウンセラーだけでは抱えきれない秘密、というものも存在します。教会で養われるべき魂が所属教会の外にしか相談相手を持たない、という状態も望

ましいものではありません。ですから、相談を受けた事柄についてはできるだけ早く所属教会の牧師にも話すよう、キャンパーに勧める方がよいでしょう。どうしても牧師に伝える必要があると判断したら、「あなたの牧師にだけは伝えておきます」と相談者に断った上で伝えるようにします。牧師には職業上の守秘義務があるので、秘密にしておくことを前提で報告することが望ましいのです。

ただし、牧師の子どもにとっては「牧師に報告する」イコール「親に報告する」となります。これについては「絶対イヤ!」となる場合がほとんどでしょう（私も十代の時はそうでした）。本人とよく相談した上で、「親ではなく牧師と割り切って報告する」か、「教会の信頼できる先輩クリスチャンに相談を引き継ぎ、牧師にはその人に知らせたことを報告する」という方法がよいかと思えます。

(6) 弱さに寄り添う

「傷ついた葦を折ることなく、ほの暗い灯心を消すことなく、真実をもつて道を示す」。理想的なカウンセラーである主イエスさまは、そのようなお方でした。真実を示すことは時につらく、苦しいことです。だからこそ、その真実を受け止

めることができるよう、相談者の「弱さ」に寄り添い、支えることがカウンセラーには求められるのです。「今の若者は弱い」。その通りです。その弱い若者たちを主は愛し、養い、主のわざを担う器として召し出そうとさせていただきます。最高のカウンセラーである主に信頼しつつ、主が出会わせてくださる若者たちに伝えさせていきたいと思います。

〔牧羊者・二〇一三年度Ⅰ、Ⅱ巻〕より再掲〕

聖書 使徒16・25〜34 テーマ 獄吏と家族の救い

序論

(福井文彦)

パウロは幻の中でマケドニア人の叫びを聞き、ギリシアで伝道した。これはヨーロッパにおける最初の伝道で、その初穂が女商人ルデヤとその家族である。その後、占いの霊から解放した女奴隷の所有者に訴えられ、投獄の憂き目にあった。しかし、主なる神は二人を獄に繋がれたままにしておくことをなさらず、獄吏と家族を救い、彼を奇跡をとおして出獄させられる。この二家族がギリシア教会の基礎となったのである。

一、占いの霊につかれた女奴隷の癒し (16〜18)

この女の主人たちは、彼女の占い(巫女、口寄せのよ(うな者))を利用して金儲けをしていた。パウロたちは、祈り場に行く途中で、この占いの霊につかれた女に出会った。それからというものの、この女は、パウロ一行の後をしつこく追いかけて、「この人たちは、いと高き神の僕たちで、あなたがたに救いの道を伝えるからだ」と叫び

続け、それをやめなかったのである。

汚れた霊につかれた者が聖霊に満たされた者に触れた時、狂乱状態に陥り超越的な力の存在者を発見して叫び出す。これは福音書などによく出てくる実例である(マルコ1:23〜24)。このことはパウロの伝道の妨げとなつた。そうした状態が毎日続くので、パウロは、「困りはてて、その霊に向かい、(イエス・キリストの名によつて命じる。その女から出て行け)」と言った。パウロの命令は復活の主の御名によるものであったので、その瞬間に霊がその女から出て行き、癒された。

二、獄屋のパウロ (19〜26)

ところがこのことは、占いの霊につかれた女を利用して、利益を得ていた女の主人たちにとつては大問題であった。金儲けの手段を失ったからである。そこで彼らは、女が悪霊から解放されたことを怒り、パウロとシラスとを捕らえて、役人に引き渡すため、広場に引き出した。その理由は、パウロとシラスが町をかき乱し、やってはならない風習をはやらせたというものであった。こうして彼らは、むち打たれ、獄屋に入れられた。

無実の罪で獄に入れられたパウロたちであったが、長

官に逆らうことなくつぶやくこともなかった。その不当な仕打ちにも関わらず、足かせをはめられた不自由さの中で、生きて働かれる神に祈り、しかも賛美を歌い続けていたのである。

ところが突然、大地震が起って、獄の土台が揺れ動き、戸は全部たちまち開いて、みんなの者の鎖が解けてしまったのである。神を信じる人の人生にはこのようなことが起こる。自分は何もできなくても、生きておられる神が、道を開いてくださる。あるいは生活の場面が展開して、当面の問題が解決していくのである。

三、獄吏とその家族の回心(27-34)

足かせをしつかりとかけられていたパウロであったが、大地震のために、鎖は解け、戸は開き、自由の身となった。この地震のため目を覚ました獄吏はこれを見て驚き、てっきり囚人たちが逃げ出してしまったと早合点し、責任を感じて自害しようとした。パウロは不当に獄屋に入れられていたにも関わらず、〈自害してはいけない。われわれは皆ひとり残らず、ここにいる〉と叫んだ。すると獄吏は、獄に駆け込んできて、おののきながら、パウロとシラスの前にひれ伏し、〈先生がた、わたしは救

われるために、何をすべきでしょうか〉と言ったのである。「先生がた」とは「主たちよ」(クリオス)である。獄吏にとってパウロたちは囚人ではなく、尊敬すべき「先生」となったのである。

「救い」への真剣な求めに対して、パウロたちの答えは、〈主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます〉であった。獄吏のたったパウロに対する信頼の態度は、やがて、イエスへの信頼に変わった。そして、獄吏と彼の全家族が救われたのである。

結論

主イエスを信じる時、その人は救われる。ただ、本人が救われるだけでなく、その救いは家族に及んでいくのである。もちろん、父が救われたからといって自動的に子が救われるという意味ではない。救われるにはおののが個人的に信仰を告白しなければならない。しかし、家族の一人が救われると、そのことが発端となり救われる人が出てくるのである。だから、先に救われた私たちは家族の救いのために真剣に祈ろうではないか。

研究資料

(宮澤清志)

テキストト

25〜26 度重なるむち打ちと足かせ(23〜24)は、ふたりを苦痛のどん底に追い込んだであろうが、それにもかかわらず、彼らは祈りつつ、主にさんびを歌い続けていた。この時、パウロとシラスとは獄屋の最も奥の部屋にいた(24)。一方、ほかの囚人たちは彼らのさんびに聞き入っていた。この2人の姿は囚人たちを感動させたに違いない。そのようなとき、**突然、大地震が起つ**た。多くの注解者は、この地震をパウロたちの祈りに対する神の応答と見る。

27 物語の焦点は、パウロからひとりの獄吏へと転換する。獄吏の務めは、囚人たちが逃亡しないように見張ることだった。彼は、ローマの軍人として、その義務に対する責任を当局から植え付けられていたことであろう。地震によって床から飛び起きた獄吏は、その責任感から真っ先に囚人の様子を見に行つたのであろう。ところが目にしたのは開け放たれた獄屋の扉であつた。最悪の事態を直感し、直ちに責任をとろうとして自害を企てた。

というのは、ローマ法によると、囚人の脱獄を許した看守は、その囚人に課せられていたのと同じ刑に服することになっていたからである。

28 ところが、獄吏はパウロの声によってその行為を遮られることになる。ある注解者は、囚人全員がそこにいることを、灯りがない中でどのようにして知ることができたのか、あるいは獄吏は自害しようとしていることをどのようにして知ることができたのか、等々様々な疑問を呈している。しかし、そのようなことは聖書の本筋からはずれたことであり、彼の部下が持つていたであろうたいまつ(29)のほのかな灯りによっておぼろげながら見ることができた可能性もあることも含めて考える必要がある。**われわれは皆ひとり残らず、ここにいる** このことばはこの看守を驚愕させた。獄屋の中には、パウロとシラスだけではなく、囚人たちが皆逃亡しないで残つていたのである。看守は、自分の経験では理解しがたい出来事が目の前で起こつた事に驚き、次節以降へと展開する。

30 **救われるために、何をすべきでしようか** 大地震という出来事と、2人の従前よりの評判、また囚人たちが

ひとり残らず逃げることはなかったという事実とが結びつき、看守は2人を神の代理人、また魔術師とでも思いこんだのであろう。獄吏の求める「救い」が何からの「救い」かは定かではないが、おそらくはこの出来事を通して彼らの伝える神を受け入れないわけにはいかないと思ったのであろう。獄吏の真剣な求めを感じる。

31 主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます パウロとシラスは、人がどうすれば救われるかについて、当時の初期キリスト教の信仰告白を反映させ「主イエスを信じる」ことによる、と答えたのであろう。すなわち、イエスを主として信頼し、この方を主と受け入れて自らをささげる必要があるということを語るのである。私たちが常に、そして繰り返し立ち返るべき事は、イエスこそ私の人生の主であるという信仰の告白である。この信仰に立つとき、人は救われる。しかも、このことは自らが救われる道であるばかりでなく、自らの家族も同様に救われる道であることを説く。聖書は家族の大切さ、一体性を強調し、家族全員が救われ、あるいは同じ神を信じることは、当然のことであるとされている(16・15、ヨシユア24・15等)。

32 救われるためには、イエスを主と信じると同時にそのお方を知ることもまた必要なことである。獄吏やその家族に対して2人はキリスト教の教えを語って聞かせた。**神の言** 福音のことである。

33 クリユストモスという古代の名説教家は、「彼は洗ってやり、洗ってもらった。彼はふたりの打ち傷を洗ってやり、自分の罪を洗ってもらった」と語っている。獄吏はふたりの家へとつれてくる前に、おそらく獄内の中庭の井戸で、ふたりの傷ついた身体を洗い、同時にそこで彼の家族共々洗礼を受けたのではないだろうか。なお、家族の受洗は、使徒では他に10・44、16・15にも述べられている。

34 自分の家 刑務所の房の上階にあったのかもしれない。**食事** 喜びの結果としての主の晩餐を意図しての食事であろうし、またキリスト者としての交わりの愛餐の意味をもつ食事であろう。またこの食事は主の聖餐を囲んだのかもしれない。**心から喜んだ** おどりがあって喜ぶ、の意味。

参考図書 I・ハワード・マーシャル「ティンデル聖書注解 使徒の働き」(いのちのことば社) 他

聖書

使徒16・25〜34

タイトル
暗唱聖句

主イエスを信じて救われよう！

主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます。

使徒16・31

目標

主イエスを信じて救いを得る者となる。

導入

(飯田勝彦)

「信じる」の反対は何でしょう？ 「疑う」です。

私たちは生活の中で多くのことを信じて歩んでいます。もつと言えば、何事も疑っていると生活できないのです。例えば「この店の物を食べたらお腹痛くなるかも知れないから、水だけにしよう」、「この新幹線、ちゃんと目的地に行くか分からないから歩いて行こう」と疑っているとうなるでしょうか。

信じるとは、委ねることです。イエス様にすべてを委ねることは、この地上の生活だけでなく、死んだ後にも大きく影響してきます。

苦難の中にも賛美を与えてくださる主を信じる

6月23日には、クリスチャンを迫害していたパウロ(サ

ウロ)が救われたことを見ました。パウロはイエス様を信じて180度変えられた人です。彼はイエス様の十字架と復活を伝え、多くの人々を救いに導く働きを任せられました。彼は、そのために命を賭けて様々な所に出かけて行きました。でも、それは決して簡単な道のみではありませんでした。多くの困難が待ち受けていたのです。ある時は、同じ民族であるユダヤ人から石を投げられ死にそうになったこともありましたが、今日の聖書箇所の前では、占いの霊に取りつかれた女の霊を追い出したこと書かれてあります。パウロたちはこの女にとって良いことをしましたが、この女の主人たちは、良く思いませんでした。それは、主人たちはこの女を利用して金儲けをしていたからです。主人たちは「パウロたちが町を混乱させている」と嘘を言って長官に訴えました。群衆も一緒に何度もむちで打たれて獄屋の一番奥に入れられてしまったのです。

これは、最悪の状況です。皆さんならどんなこと言うでしょうか。「俺たちは何も悪くない！ 神を信じているのに何でこうなるんだ！」と叫びますか？ パウロた

ちの姿が25節にあります。最悪の状況の中で彼らの口からは賛美が溢れました。「囚人たちは耳をすまして聞き入っていた」(25)とありますから、パウロたちは誰にも聞こえないような小さな声で賛美したのではないはずです。「聞き入っていた」ですから、囚人たちの心にも届く賛美であったのでしょうか。誰がパウロたちにこのような力を与えたのでしょうか。それは神様です。

主は、信じる者に困難の中でも賛美を与えてくださいます。さらに、その賛美を通して内側に困難を乗り越える力を与えてくださるのです。

喜びを与えてくださる主を信じる

主は不思議なことをされる方です。パウロたちが主を賛美していると、突然、大地震がおきました。そのことで獄の土台が揺れ動き、戸が全部開いてみんなの鎖が解けました。獄吏は、戸が開いているのを見て、囚人たちがみな逃げ出したかと勘違いしました。彼は責任を感じて自ら命を絶とうとしたところ、パウロがそれを止めたのです。命拾いした獄吏はパウロとシラスに「先生がた、わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」と彼らの前にひれ伏しました。獄に入れられている者に救い

を求めるとは不思議な光景です。獄吏は、獄中という困難の中で賛美するパウロらの姿や彼らの心の自由さに驚いていたに違いありません。彼はパウロらに「先生がた、わたしは救われるために、何をすべきでしょうか!」とひれ伏して叫びました。するとパウロらは迷うことなく「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」とはつきりと答えました。その後、獄吏もその家族も洗礼を受け、神を信じる者となったことを、全家族と共に心から喜びました。

獄吏の家族にはこれまでとは違う、主がくださる喜びが家族に満ちたのです。

まとめ

人生には多くの悩みや苦しいことがあります。でも神であるイエス・キリストを信じて救われると、困難の中でも賛美と主にある喜びが与えられます。これは救いを受けた者の大きな恵みです。このような素晴らしい恵みをくださる主イエスを信じるのに、何か妨げているものはありますか？

♪さあ イエスさまを信じましょう♪ (ホ60)

聖書 列王上17・1～16 テーマ 生きて働かれる神

序論

(高橋頼男)

預言者エリヤはイスラエルの王アハブに言います。
「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられます」。エリヤのように私たちも、生きて働かれる神を知り、大胆に告白する者となりましょう。

一、祈りに答えられる神(1)

「イスラエルの神、主は生きておられます」。この言葉は、エリヤの生き生きとした信仰を言い表わしています。しかし、この言葉は誰でも言うことができる敬虔な言葉でもあります。生きておられる神をその実質をもって知り、生活の中で生き生きと告白する者でありたいものです。それは、私たちの祈りを通し、祈りに答えられる神を経験することから来ます。その時、私たちはこの言葉を生きた信仰の言葉として大胆に告白することができます。エリヤは、偶像礼拝が国を覆い、イスラエルが主にそむいて御名を汚している現状を憂い、激しく泣いて祈りました。そして、ついに一つの確信を得ます。申命記

11・16～17にある神のみ言葉がなされる以外に、イスラエルが主に立ち返る道はないことを知りました。そして、アハブ王の前に立ち「わたしの言葉のないうちは、数年雨も露もないでしょう」と宣言したのです。

「エリヤは、わたしたちと同じ人間であったが、雨が降らないようにと祈をささげたところ、三年六か月のあいだ、地上に雨が降らなかった」(ヤコブ5・17)。信仰は主義・主張や願望ではありません。神との生きた関係であり、祈りを通してのリアルな神経験です。

二、訓練される神(3)

神はエリヤに「身を隠す」よう命じられました。「身を隠すことを学ぶ人だけが、神の権威をもって人の前に現れることができる。…また、その所こそ、神の人がさらにまざる奉仕のために備えられる場所である」(沢村五郎『聖書人物伝』)。神がエリヤを訓練するため、最初に選ばれた場所は、ケリテ川のほとりです。訓練の目的は、神への完全な信頼と服従です。訓練の中心は、ケリテ川の水とからすによって養われることを通し、どんな状況や環境にあっても、神と神の言葉に信頼して、そこに留まり続けることでした。ケリテ川の水は日々枯れてい

き、もはや、あと一すくいの水を残して枯れ果ててしまふところまで来ました。しかしエリヤは、神の言葉に信頼して静かに留まり続けました。決して自分で自分を救うために立ち上がることをしません。まさに水が完全に枯れ果てたその時、主はエリヤに声をかけられました。〈立つてシドンに属するザレパテへ行つて、そこに住みなさい。わたしはそのところのやもめ女に命じてあなたを養わせよう〉。そこに、主の訓練の第二ステージが備えられていました。「不信仰は、神と自分との間に事情を置く。そのため雲を隔てて月を仰ぐように、神を拝することが出来ない。しかし、信仰は、事情と自分との間に神を置く。それゆえどんな事情環境の中にあつてもなお、泰然としていることができる。エリヤは、ただ主の御手に支えられていた」(沢村五郎・前掲書)。

三、養われる神(4・5・6)

ヨルダンの東にあるケリテ川の場所は今日明らかではありません。当時も人里離れた所だったでしょう。だれでも、住みなれたところから離れ、寂しい場所に行くことには不安があります。どのようにして生きていくのか、どうして食べていったらいいのか、全く当てがありません。

せん。もしエリヤに少しの躊躇があつたとしても、不思議ではありません。その時、神様は「わたしはからすに命じて、そこであなたを養わせよう」と約束されました。しかし、どうでしょうか。いくら、神様のおことばでも、果たしてからすの養いに身を委ねることなど出来るでしょうか。しかし、エリヤは、神のことばに従いました。それは、エリヤを養うのはからすではなく、(ザレパテのやもめでもなく)そこに遣わされる神であり、自分が告白する生きて働かれる神であると信じたからです。

長く関西聖書神学校の学監、校長代行として勤められた向後昇太郎先生は「伝道者」でした。戦前、戦中、戦後と日本の一番厳しい時代に、ただ生ける神だけを当てに福音を携え、大阪府下、奈良の山村僻地まで先生の歩かなかった地はないと言われます。向後師の座右の銘は、〈かめの粉は尽きず、びんの油は絶えなかった〉でした。

結論

祈りを通して生きておられる神を知り、その神の訓練を受け、生きて働かれる神はまた養いの神であることを知って全き信頼、徹底した服従、思い切った献身の生涯を主にささげましょう。

研究資料

(中島啓二)

預言者エリヤが登場するこの章は、冒頭の宣言(1)と、続く三つのエピソード、①荒野で養われるエリヤ(2～7)、②粉と油の奇跡(8～16)、③やもめの息子の復活(17～24)とから成るが、それらのつながりに目を留めて理解することが必要である。例えば、干ばつを宣言したことがエリヤの荒野行きの必要性を生み、ケリテ川が枯れたことが彼をザレパテへと向かわせる。干ばつはまた食物の不足につながり、それが粉と油の奇跡の前提を生むのである。もちろんそれらのことは偶然の成り行きでそうだったのではない。「主の言葉」(2、8)がエリヤの行動を決定づけ、さらにはエリヤを養うからすややもめさえも(彼らが意識しているかどうかは別として)主の命令に基づいて行動するのである(5、10)。

これら三つのエピソードに共通する問題は死であり、その解決は命である。その答を与えることができるのは「生きておられ」る神(1)以外にない。そのことを、命のない偶像により頼む王や国民に判らせるために、この三年間の干ばつの期間は必要であった。またそれはエリ

ヤの訓練期間でもあった。すなわち、この三つの出来事を通して、エリヤの姿勢は受動から能動へと移っていく。最初は単純に従い、養いを受けるだけであったが、最後は、率先して神に聞かれる祈りをささげたのである。「今わたしはあなたが神の人であることと、あなたの口にある主の言葉が真実であることを知りました」(24)とのやもめの告白は、彼が今や攻撃に転じ、バアルとの公の対決に向かう準備が整ったことを知らせる合図と言える。その中で、ケリテ川からすの養いを受ける従順は、決して次元の低い初歩ではなく、すべての基本となる大切な信仰の土台であったのである。

テキスト

1 テシベびとエリヤ テシベの位置は不詳。エリヤは「主(ヤ)はわたしの神(エリ)」の意で、まさに彼の使命を象徴的に表している。アハブ アハブと妻イゼベルの方針は、バアルを「主」に取って代わるイスラエルの神とすることであった。バアルとは、フェニキヤに由来し、カナン人も崇拜した偶像で、稲妻と雨の神、そして豊穡^{ほうじょう}をもたらす神とされていた。イスラエルの神「アハブは彼よりも先にいたイスラエルのすべての王にま

さってイスラエルの神、主を怒らせることを行つた」(16・33)。彼はイスラエルの王であるにもかかわらず、イスラエルの神、主を、自分の神としなかつたのである。主は生きておられます 主なる神は「生ける神」であり、ご自身の民の必要に應えてくださるという点において、他のすべての「命なき」神々と根本的に異なる。わたしの言葉のないうちは、数年雨も露もないでしょう 降雨と豊穡は言わばバアルの専門分野であり、この宣言は、バアルへの挑戦でもあった。雨が何年も降らないことは普通ありえないことで、偶然を頼みとするならば、バアルが圧倒的に有利であった。だからこそ、かえって、もしこの宣言どおりになるならば、主こそ神であることがはっきりと示される。19章における有名な対決は、この時すでに始まっていたのである。

3 ケリテ川 正確な場所は不明のワジ(雨期のみ水が流れる谷川)。鳥による荒野での養いは出エジプトの出来事を想起させる(出エジプト16・13)。身を隠しなさい エリヤを敵の手や飢きんから守るためであらう。

4 その川の水を飲みなさい 他の川が干上がる中で、真つ先に干上がるはずのワジに水があることは本来あり

得ないことで、生ける神の力の表れであった。からすワジのような岩場に巣を作り、食物を貯える習性がある。7 しばらくしてその川は干涸びた 力及ばずということではもちろんなく、計画が次の段階に進むためであった。そしてエリヤはバアルの本拠地とも呼べるフェニキヤに乗り込んでいくのである。

12・16 わたしにはパンはありません… イスラエルへのさばきは異邦の地にも大打撃を与えたが、同時に恵みの御手は異邦の女性にも伸ばされた。しかしまず、それでわたしのために小さいパンを、一つ作って持ってきたさい 自然界(からす)を通して養われる主は、物質(粉と油)をも自在に支配して救いを実現される。主に信頼するならば、イスラエル・異邦人の区別無く主の祝福に与ることが出来る。その信頼の応答に向けて、エリヤはやもめを励ました。『…かめの粉は尽きず、びんの油は絶えない』とイスラエルの神、主が言われるからです すべての根拠は人のわざではなく、主の言葉にある。

参考図書 注解書 S. J. De Vries (Word), R. Nelson (Interpretation), 服部嘉明(新聖書注解 旧約2)。その他 The IVP Bible Background Commentary: OT

聖書

列王上17・1-16

タイトル

エリヤ① 生きて働かれる神

暗唱聖句

わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられます。 列王上17・1

目 標

生きて働かれる神を信じて、神に仕える者となる。

導入

(和田牧子)

皆さんは、もしお友だちから、「聖書に書かれている神様って、今でもほんとに生きてるの?」と聞かれたら、どう答えますか? 今日、「私の仕えている主は生きておられます」とはつきり言うことができたエリヤに注目しますよ。

主なる神様は生きておられる

「これからはこの国の神様はバアルだ。皆、バアルを神として拝め。主なる神など神ではない!」大変です。アハブ王さまが、命のない、にせの神様を拝むようにイスラエルの人たちに命令したのです。もちろん、主なる神様はお怒りです。

そこで、エリヤが預言者として遣わされて言いました。

「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられます。わたしが何かを言わないいうちは、数年、一滴も雨も露も降らないでしょう」。

バアルを拝んでいる人々は、バアルが雨を降らせてくれていると信じていました。しかし、生きておられる本当の神様だけが、雨を降らせ、命を与え、お育てくださるのです。

主なる神様は養ってください

大胆に、バアルはウソの神様だと宣言したエリヤは、どうなってしまうのでしょうか。怒った王様はエリヤの命をねらうかもしれません。神様はエリヤにおっしゃいました。「ここを離れ、東の方に行き、ケリテ川のほとりに隠れなさい。そしてその川の水を飲みなさい。わたしはからすに命じて、そこであなたを養わせよう」。

エリヤは、主なる神様のおつしやるとおりにしました。すると本当にかからすが毎日朝夕欠かさず、エリヤのところにパンと肉を運んできたのです。すごいですね。神様は、神様に忠実に仕えるエリヤを愛し、毎日の必要な食べ物、カラスを用いて与えてくださいました。

主の祈りをお祈りしたことはありますか。「われらの

日用のかてを今日も与えたまえ」とお祈りしますよね。これは「私たちの毎日の食べ物や洋服、身の回りのお世話はおうちの人がしてくださいますね。でも、お金も食べ物も洋服も、もともとは、神様が私たちの必要のために与えてくださったものなのです。」

なぜなら人間も空気も、お水もすべて、神様が造られたからです。神様は、私たちが元気いっぱい生きていけるように、毎日養ってくださいます。ですから、おうちの人にいつも「ありがとう」というだけでなく、「神様ありがとうございます。今日も必要をお与えください」とお祈りすることが大切なのです。

主なる神様の恵みは尽きない

さて、エリヤのいったとおり、イスラエルに雨が降らなかつたために、ついにケリテ川の水も枯れてしまいました。今度はどうやって、エリヤは食べていけばよいのでしょうか。神様はエリヤにこう言いました。

「ザレパテに行つて、そこに住みなさい。夫のいない一人の女性に命じてあなたを養わせよう」。エリヤはその女性に声をかけました。「器に水を少し分けて、飲ま

せてください」。また「手に一口のパンを持ってきてください」。

もちろんこの女性の家も、水や食べ物ギリギリの状態でした。雨が降らなければ作物もとれません。「わたしには、かめに一握りの粉と、びんに少しの油があるだけです。今わたしは家に帰つて、それらを料理して、子どもたちと食べて死のうとしているのです」。

エリヤは落ち着いて女性に言いました。「恐れるにはおよびません。『主が雨を降らせる日まで、かめの粉はつきず、びんの油は絶えない』と主なる神様は言われるからです。」そしてその言葉のとおり、エリヤも、彼女もその家族も、毎日おなかいっぱい食べることができたのです。

結び

主なる神様は今も生きておられて、私たちの毎日の生活に関わってくださいます。私たちの必要を全てご存知で、信仰をもつてお従いする者に、豊かに与えてくださる方なのです。嬉しいですね。命のないにせ者ではなく、生きて働かれる主なる神様を信じて歩みましょう。そして精一杯神様に仕える者となりましょう。

♪まことの神さま♪（イン3、ホ12、ふ67）

聖書 列王上18・20・40 テーマ 神のための戦い

序論

(高橋頼男)

エリヤは偶像礼拝に落ちたイスラエルを目覚めさせ、彼らを偶像崇拜から救い出して主に立ち返らせるために一人立ち上がりました。そして、カルメル山に全イスラエルとバアルの預言者450人、アシラの預言者400人を集めるよう、アハブに言いました。そこに祭壇を築いていけにえをささげ、主が神かバアルが神か、火をもつて答える神を神とするという戦いをしかけたのです。その結果、エリヤの祈りに答えて天からの火が下りました。それを目の当たりに見た民はひれ伏し「主が神である。主が神である」と言つてバアルを捨て主に立ち帰りました。エリヤは、バアルの預言者を捕え、キシヨン川に連れ下つて殺しました。刑罰の厳しさは罪の深刻さでした。

一、よろめく民の前に一人で立つ(21)

エリヤは民の前に立ち、「あなたがたは、いつまでどっちつかずによるめているのか。もし主が神であれば、それに従い、もし、バアルが神であれば、それに従え」

(新改訳)と言いました。エリヤの戦いと挑戦はアハブやイゼベル、バアルの預言者たちに対してだけでなく、よろめく民に対してなされています。民はバアル礼拝を行いながら、自分たちの神、主を捨てたという意識がありません。バアルにもいけにえをささげていただけのことでした。しかし主とバアルの両方に仕え、バアル礼拝に抵抗せず、排除しないことは主に仕えていないことです(マタイ6・24、ヤコブ4・8、1ヨハネ2・15)。

今日も、同じ戦いが迫っています。私たちにとつて最も深刻な問題は異教や異端との戦いではなく、私たちのキリスト信仰や教会の中にいつの間にか「混淆主義」^{こんりゆう}が入り込んでいることです。クリスチャンとクリスチャンでない人との生活や行動に何の違いもなければどうでしょう。この世の性の混乱が教会に入ってきています。権力に迎合し、世の成功に感嘆し、大量消費に呑みこまれ、「貪欲」というバアル礼拝がクリスチャンや教会の中まで入り込んでいます。いつの間にか当たり前になつてしまった(クリスチャンとして本来ありえない)習慣や判断が教会の中で見うけられないでしょうか。私たちは、私たちを取り巻く文化の流れにいつの間にか

取り込まれてしまっているのです（ヘブル2・1）。

エリヤは、「主もバアルも…」ではなく、「主が神か、バアルが神か」、迷っている神の民にはつきり突きつけて戦いました。迷いよるめいているすべてのイスラエルの前に戦いを挑むエリヤは、自分で行っていることが主のみ言葉と確かな臨在の中でなされていること、神の干渉と見守りの中に置かれていることを完全に信じて立っていました。何と驚くべき信仰でしょう。この時代の中で、神のみ言葉に固く立ち、生活と行動においてぶれない信仰が教会に必要とされているのではないのでしょうか。

二、壊れている祭壇を繕う（30）

エリヤは、この戦いにおいてまず、壊れている祭壇を繕い築き直しました。「壊れている祭壇」とは、主の民が主への礼拝をものはや失っている姿、崩れていた神礼拝の姿です。形式信仰や形式礼拝のみが残り、全てに命が失われていました。生きた神礼拝の回復こそ最優先されるべきことです。私たちは自分の信仰を主のみ前に吟味し、デボーションや礼拝生活が祝福され、本当に命あるものとなっているか主の前に問い直しましょう。壊れている祈りの祭壇を築き直すことから始めなくてはなりません。

エリヤは十二の石で主の名によって祭壇を築き、主の民が神の選びと契約による存在であることを改めて確認しました。教会がみ言葉によって整えられることです。祭壇の上に雄牛が備えられ、その上に大量の水が注がれました。自然的、人為的なあらゆる可能性を防ぎ、ただ神のみわざが現れるために備えがなされました。

三、天からの火を求める（36～37）

エリヤは民を自分のそばに近寄せ、神の前に進み出て「主よ、わたしに答えてください」と訴えました。この戦いはエリヤの野心や自己中心の思いではなく、迷っている民に、主が神であり、エリヤが神の僕であってすべてが神の言葉に従ってなされたことが明らかにされた。祭壇の上に天からの火が下ったことを目の当たりに見た民はひれ伏し、「主が神である。主が神である」と言いました。神が信仰の祈りに答えられる生ける神であり、また、イスラエルが本来この神の所有の民であることが明らかになったのです。

結論

神のためみ言葉に堅く立ちましょう。主は、主と教会のために立ち上がる人を求めておられます。

研究資料

(小平徳行)

「数年雨も露もない」とエリヤによってアハブ王に宣告された神は、それから三年目になる時に、雨を地に降らせることをエリヤに予告された。そのためにアハブに会うように命じられる。それは再び雨が降るようになるためには民の悔い改めが必要であったからである。そこで主こそ真の神であることを示すための対決をすることになった。

テキスト

20 カルメル山 現在のハイファ南方で、エスドラエロンの谷から地中海の端まで南東から北西方向に伸びる約32 kmの長さの峰。標高約600 m。

21 あなたがたはいつまで二つのものの中に迷っているのですか。主が神ならばそれに従いなさい イスラエルの民は主を捨てたというつもりはないが、バアルにもいけにえをささげていた。つまり主とバアルの両方のために場所を作ろうとしていたのである。しかし「ふたりの主人に兼ね仕えることはできない」(マタイ6・24)。それゆえエリヤは何に従うべきかを考え、決断するように

挑戦したのである。これは妥協を許さない提案であった。

22 わたしはただひとり残った主の預言者です。しかしバアルの預言者は四百五十人あります この時のエリヤはひとりであることを全く恐れていなかった。彼は真の神に仕えているのであり、その神が用いられるならば敵が何人いても問題ではない。

24 そして火をもって答える神を神としましょう 神はこれまでも火を下してこられた(レビ9・24、士師6・21、歴代上21・26、歴代下7・1)。神は焼き尽くす火である(ヘブル12・29)。エリヤは、神は昔も今も変わらないうことを信じて大胆な態度をとって神を証しようとした。それがよくろう バアルは太陽神であり、熱はその要素であるから、この提案はバアルを拜む者にとって受け入れずにおれないものであった。

26 28 バアルの預言者は激しく叫び、身を傷つけることとまでした。彼らの頼みは、自分たちの熱心さであった。29 顧みる者もなかった 何の兆候もない事を意味する。

30 こわれている主の祭壇を繕った ここに主を礼拝し

なくなっている民の姿が反映されている。かつては北イスラエルの中で神に忠実な人々が、この祭壇で礼拝をさげていたが、アハブとイゼベルの支配の下で自分たちの礼拝をささげることが許されなかったのかもしれない。祭壇を繕うこと、つまり礼拝の回復が、神のみわざのためにまず必要なことであった。

31 十二の石 現在の分裂状態を悲しみ、部族の一致を願われる神の願いを象徴する。

32 種二セヤをいれるほどの大きさ 1セヤは約7.3リットル。おそらく祭壇の周りの溝の幅を意味しており、90cmそこそここのことであろう。

33 34 四つのかめに水を満たし、それを燔祭とたきぎの上に注げ 神のみわざ以外による自然発火、または何らかの人為的なわざによる発火のあらゆる可能性を徹底して防ごうとした。またこれは主の御力に対するエリヤの確信を示すものでもあった。

36 39 夕の供え物をささげる時になって エリヤは普段の礼拝の方法に準じて行った。わたしがあなたのしもべであって、あなたの言葉に従ってこのすべての事を行ったことを、今日知らせてください ここまでの一連

の出来事は、すべてエリヤではなく神が計画されたことであつた。そしてエリヤは自分がしもべであつて、主人の意思に従い、主人の手の中の道具にすぎない者であることを表明している。彼は主にすべて明け渡し、ゆだねていたのである。主よ、この民にあなたが神であること…を知らせてください エリヤは単に主が神であることを奇跡によって実証することを祈り求めただけでなく、イスラエルの回心を求めた。主が神である この民の承認の言葉自体がエリヤの祈りの答えであつた。

40 バアルの預言者たちを殺したのは気まぐれになされた残酷な行為ではなく、偽預言者に対して律法で命じられていることに従ってなされた必要な懲罰であつた（申命記13・5、13 18）。この罪がいかに深刻であるかを示している。

参考図書 久利英二「列王記」『実用聖書註解』、舟喜信『新聖書講解・列王記』、ドナルド・J・ワイズマン『ティンデル聖書注解・列王記』（以上ののことは社）、ハーヴェー・E・フィンレー「列王記第一、第二」『ウエスレアン聖書注解・旧約篇2』（イムマヌエル綜合伝道団）、他

聖書

列王上18・20～40

タイトル

エリヤ② 火をもって答える神

暗唱聖句

火をもって答える神を神としましょう。

列王上18・24

目 標

神のために信仰をもって戦う者となる。

導入

(和田牧子)

「教会学校に来ている時には神様にお祈りをして、み言葉を信じているけど、ふだんの生活は、神様を信じていない人たちと何も変わらない」。皆さんのの中にそんな人はいますか？ せっかく神様がいつも一緒にいてくださるのに、それじゃあ残念ですよね。勇気をもって神様のために戦ったエリヤに、今日も注目しましょう。

カルメル山に全員集合！

「アハブ王よ！ イスラエルの全国民と、バアルの預言者四百五十人、それにアシラの預言者四百人を、カルメル山に集めなさい。」エリヤの言葉に王はカンカンです。「おのれ、生意気なやつめ！ 今度こそエリヤを倒してやる！」カルメル山は大騒ぎ。イスラエルの民やバアルの預言者たちでこった返しています。エリヤは語

りかけました。「イスラエルのみんな。いつまで二つのものの間に迷っているのですか。主が神ならばそれに従いなさい。しかしバアルが神ならばそれに従いなさい。」

火をもって答える神こそ

いったいどちらが本物の神様なのか、エリヤははっきりと示そうとしています。その方法はこうでした。一頭の牛を切り裂き、たきぎの上にのせます。もちろん火をつけません。「あなたがたはあなたがたの神の名を呼びなさい。わたしは主の名を呼びましょう。そして火をもって答える神を神としましょう！」。

さあ大変です。なんてったって、バアルの預言者は450人もいるのです。でも、イスラエルの神を信じる預言者は、エリヤたった一人だけ。大丈夫でしょうか？

「バアルよ、バアルよ！ どうかお答えください。」朝から昼まで叫び続け、踊り続けたバアルの預言者に、誰からも、何の答えもありません。「おやおや、あなたがたの神は考えごとでもしているのかな？ 旅にでも出かけかい？ ひよっとして眠っているのか？」エリヤの言葉にますますむきになって、彼らは刀とやりで自分たちのからだを傷つけ、血を流すことさえしました。そんな

な激しい祈りにも、何の答えもないのです。人間が作ったにせ者の神様を拜むって、なんてむなしいことなんでしょう。

主が神である

いよいよエリヤが祈る番です。皆を近くに呼び寄せ、こわれていた主の祭壇を、丁寧に築き直しました。次に、祭壇の周りに深いみぞを掘ったのです。たぎぎを並べ、牛を切り裂いてたぎぎの上にのせた上で、命じました。「四つのかめに水を満たして、いけにえの牛とたぎぎの上になつぷりと注ぎなさい」。エリヤの指示で、なんと、三回も水がかけられました。祭壇の周りもみぞも、水びたしです。そこでエリヤは祈りました。「主よ、私の祈りに答えてください。ここにいる皆が、あなたが神であることをはっきり知ることができるようにしてください。人々があなたのもとに帰ってくるようにしてください。どうか私の祈りにお答えてくださり、火を下してください」。そのときです。「ゴォッー」突然、天から主の火が降り、いけにえや祭壇を全て焼きつくし、みぞの水もすっかり蒸発させたのです。何ということでしょう。皆びつくり！ ひれ伏して叫びました、「今こそ分かりました。

主こそ神です。主こそ本物の、唯一の神様です！」。

信仰の戦い

主なる神様を心から信じるエリヤは、信仰の戦いを戦い抜き、勝利しました。実は、皆さんにも「信仰の戦い」の場面があります。悪いことをしている人がいても、いじめっ子やいじめられっ子がいても、知らん顔、関係ない。先生に見つからなければ、みんなやっていることだから、ちょっとくらいいいことをしたって嘘をついたってへっちゃら……。これでは、バアルの神と主なる神様と、どっちつかずで、迷いながら罪を犯していたイスラエルの人々と変わりません。あなたが本気で神様を信じて祈るなら、神様は答えてくださいますよ。主なる神様のために信仰をもつて戦うエリヤのようなクリスチャンになりましょう。信仰の戦いに勝利しましょう。

結び

エリヤが祭壇を築き直したように、私たちも信仰をもつて祈りましょう。罪を悔い改め、「主よ、あなたに従い続けることができるよう、助けて下さい」と。自分の力ではなく主の力でこそ、勝利できるのですから。

♪主のパワー♪ (GS 36)

聖書 列王下2・1～15a テーマ エリシャ① 霊の二つの分

序論

(小泉 創)

偉大な働きをなした人の後継者となるのは容易なことではありません。エリヤは預言者を代表する人物でした。バアルとの戦いという大仕事を終えて疲れ切ったとき、神はエリヤの働きを引き継がせるためにエリシャをお選びになりました。今日の聖書箇所は、エリヤからエリシャへとバトンが渡される場面です。

一、エリヤの最後の旅

エリヤは自分が地上を去る時が来たことを悟り、最後の旅に出ました。エリシャもそのことを神から示されていたのでしよう。エリヤに従って行きます。エリヤはエリシャを連れて行くとうとはしませんが、それでもエリシャはやめません。エリヤに従うことを決めた時から、エリシャはずっとそうしてきたのです(列王上19・20～21)。

エリヤはギルガル、ベテル、エリコと旅を続けます。

それらの町には預言者である仲間たちがいました。各地を訪問したエリヤの目的は明確にはなっていないませんが、最後の別れをし、神の働きがまかされた彼らを励まし、あとのことを託そうとしたのかもしれない。預言者たちはエリシャに、エリヤが地上を去る日が近いことを告げますが、エリシャはそのことを知った上で淡々とエリヤに従って行きます。

ヨルダン川のほとりでエリヤが外套を取って水を打つと水が左右に分かれました。エリヤとエリシャは、仲間たち五十人が見守る中、ヨルダン川のかわいた土の上を渡っていきました。その光景はモーセに率いられた民が紅海を渡ったときのこと、ヨシユアに率いられた民がヨルダン川を渡ったときのことを思い起こさせたことでしょう。

二、エリシャの願い

ヨルダンを渡ったエリヤはエリシャになにをしてほしいかを尋ねます。エリシャが望んだことは「あなたの霊の二つの分をわたしに継がせてください」ということでした。これはエリヤの二倍の働きを望んだものではありま

せん。長子の相続分をあらわしている言葉ですから、エリシヤはエリヤの後を継いで神の働きをしていくこと、そのための霊の賜物を求めたのです。

これはエリヤであっても、かなえることはできません。霊の賜物は神が与えられるものだからです。私たちも賜物や責任、果たすべき役割、歩む道のり、さまざまなことを主に求めます。しかしすべては主の手の中にあり、すべてのことに主の時と方法があるのです。ですから願いを申し上げながら、主に委ねることが私たちのなすべきことです。

エリヤとエリシヤが語り合っているとき、彼らの間を火の車と火の馬が隔て、エリヤはつむじ風に乗って天にのぼって行きました。エリシヤはその光景を見ることがゆるされたのです。それは主が選ばれたしるしでした。

三、受け継がれた使命

エリヤとエリシヤがヨルダンを渡るまでの道のりは、イスラエル民族がカナンに入ってきたときの逆の道筋でした。そして今、主はエリヤに代わる新しい預言者エリシヤを民のもとにお送りになるのです。エリヤの外套を

取り上げたエリシヤは、エリヤがしたのと同じようにヨルダン川の水を打ちました。神の奇跡によって、水は分かれ、エリシヤはヨルダン川を越えていきました。エリヤと共におられた神は、確かにエリシヤと共におられ、御力をあらわされます。それを見た五十人の仲間たちは、〈エリヤの霊がエリシヤの上にとどまっている〉と証言しました。

神の働き人は神によって選ばれます。主なる神を愛し、どこまでも従っていこうとする者を豊かに用いてくださるでしょう。

結論

私たちも多くの先輩たちに養われ、導かれてきました。同じ働きをできるとは思いません。しかしその人々を用いられた主は、私たちの主でもあります。主は今の時代もご自分に従う者を求めておられます。私たちをも今の時にふさわしく用いてくださると期待しつつ、主の導かれるところに従ってまいりましょう。

研究資料

(辻林和己)

列王上19・19～21はエリシャが預言者エリヤと出合い、彼に従ったことを告げる。

今回の個所は、エリシャが、神によってエリヤの後継者として立てられるときの出来事が語られている。

テキスト

1 つむじ風(へ)シユアラー)は、「たつまき」(新改訳)や「嵐」(新共同訳)とも訳されている。聖書では火、雷、地震等のように神の顕現を示す現象とされる(ヨブ38・1、イザヤ29・6参照)。

2 主は生きておられます。またあなたも生きておられます 当時の誓いを述べる時の慣用句。エリヤとエリシャのここでのやり取りは、この後、ベテル、エリコでも繰り返される(4、6)。

3 預言者のともがら 原文は「預言者の子ら」。エリヤの指導を受けていたり、その影響下にあった預言者集団。町ごとにまとまった集団があり、彼らはエリヤが地上から去る日が近いことを神から示され、知っていた。

あなたがたは黙っていてください この言葉の意味については諸説ある。預言者の仲間からエリヤの最後のことを聞いたエリシャがそれに対して冷静に対処できるかの試みであり、彼は適切に答えたという説。エリヤが地上を去る日が近いことをエリシャも知っている。このことをエリヤに知られるのをエリシャは好まなかった。故にエリヤに配慮して彼らを黙らせようとしたのだという説等がある。預言者集団とエリシャとのやり取りは、エリコでも繰り返される(5)。

7 預言者のともがら五十人も行って 彼らはエリヤがどのように昇天するのかを知りたいと思って二人から離れた所に立っていた。

8 それを巻いて水を打つと、水が左右に分れた エリヤとモーセの姿が結び付けられて語られている。かつてモーセは、イスラエルの民をエジプトから導き出す際に、彼の権能の象徴である杖を用いて紅海を渡った(出エジプト14・21～22参照)。同じように、エリヤも彼の丸めた外套を用い、神からの力によってエリシャと共にヨルダン川を渡った(ヨシユア3・17節参照)。

9 霊の二つの分 当時、長子は、他の兄弟の二倍の取

り分を受け継いだ(申命記21・17)。エリシヤはエリヤの後継者、指導者となるためにこのことを求めた。

10 あなたは**むしろ**かしい事を求める 人(エリヤ)が人(エリシヤ)に「**霊**」(神の霊、霊の賜物)を与えることはできない。神のみが人に霊の賜物を与えることができる。**あなたがもし、見るならば、そのようになるであろう** エリヤは、神がエリシヤを預言者、指導者として立たせられるかどうかを、全く神に委ねた。

11 **火の車と火の馬** 原文では「車」は単数。「馬」は複数。「万軍の主」のように主の力を戦力で表現したもの。

12 **わが父よ** エリシヤにとってエリヤは恩師であり、父親のような存在であった。**イスラエルの戦車よ、その騎兵よ** 騎兵と戦車は神の霊的臨在の力とイスラエルに対する強力な保護とを象徴するもの。エリヤはイスラエルにとってそのような存在だった。**それを二つに裂き** 驚くべき突然の現象の中で、エリヤが自分のもとから去ったことへのエリシヤの悲しみの気持ちの表われ。

13 **外套を取り上げ** エリシヤはエリヤの預言者としての職務の象徴である外套を拾った。これはエリシヤにエリヤの務めが引き継がれたことを示す。ヨルダンの岸に

立った ヨルダン川の東岸に立った。彼が目指すのは、ヨルダン川西側のカナン地域である。

14 **彼が水を打つと、水は左右に分れた** エリヤのときと同じ奇跡(8)が起こった。神がエリシヤを後継者として立てられたことのしるし。「エリヤの神、主は…」とエリシヤが呼びかけ、尋ねた神は、このときすでに「エリシヤの神」として共におられた。

15 **エリヤの霊がエリシヤの上にとどまっている** 預言者のともがらには、このことが目に見える何らかの形で示されたのかもしれない。あるいはヨルダン川での奇跡を見てこう言ったのかもしれない。いずれにしても、彼らはエリヤの最後の姿は見えていない。それを見たエリシヤは、9節で願った「エリヤの霊」を継ぐ者とされた。この後、エリシヤは、エリヤの正統な後継者として、神に従い、尋ね求めつつ、様々な体験を重ねながら、自分に与えられた使命を果たしていく。

参考図書 D・ワイズマン「列王記」『ティンデル聖書注解』(いのちのことば社)、服部嘉明「列王記」『新聖書注解・旧約2』(いのちのことば社) 他

聖書

列王下2・15a

タイトル

エリシャ① 霊の二つの分

暗唱聖句

どうぞ、あなたの霊の二つの分をわたしに継がせてください。 列王下2・9

目標

神の働きの継続のために用いられるものとなる。

導入

(土屋開夫)

皆さんには、尊敬している人や先輩や先生がいますか？ 「あの人はスゴイ。すばらしい。あの人から色々なことを教わった。あの人のようになりたい！」と思う人。教会学校の先生を尊敬してる、という子もいるかも知れませんか。

でも、その尊敬してるすばらしい人といつまでも一緒にいられる訳ではありません。学校を卒業したり、引越したり、その人が先に天国に行ってしまうかも知れません。もし、そんな事になったら、とっても心細いですね。そんな時はどうすればいいのでしょうか。

エリヤさんの弟子、エリシャさん

先週と先々週は、預言者エリヤさんが大活躍しましたね。エリヤさんは聖書の中で一番有名な預言者です。けれども、どんなに立派な「神様のしもべ」でも、いつまでも地上で活躍できる訳ではありません。やがて自分の役割を終えて、天国に帰る時が来るのです。ですから、その人の後を引き継いで神様の御用をしてくれる人、バトンタッチする人、難しい言葉で言うと「後継者」が必要です。エリヤさんの後継者、弟子に選ばれた人、それがエリシャさんでした。

別れの時

エリシャさんは、先輩であり先生であるエリヤさんとしばらく一緒にいて、大切な事を色々教わった事でしよう。神様のこと、信仰のこと、預言者の働きのこと。けれども、やがて別れの時が近づきました。エリヤさんは天国に帰らなければなりません。弟子のエリシャさんはどんな気持ちだったでしょう。「嫌だ、エリヤさんと別れたくない。もっとたくさんのお話を教わりたい。それに若いボクなんかじゃ、エリヤさんのような立派な働きは

とても無理だ。一人にしないで欲しい!」、そんな思いだったかも知れません。エリヤさんが「ここにとどまってください」と何度言っても、エリヤさんは「わたしはあなたを離れません」と最後までついて来ました。

けれども遂に別れの時が来ました。エリヤさんは最後に「あなたのしてほしい事を求めなさい」と言いました。するとエリヤさんは「どうぞ、あなたの霊の二つの分をわたしに継がせてください」と言いました。当時、イスラエルの家の長男は、お父さんの財産を他の兄弟の二倍、受け継ぎました。つまりエリヤさんはエリヤさんに宿っている「聖霊様の恵みと力」を「私に受け継がせて下さい!」と求めたのです。正にそれはエリヤさんの後を引き継ぐエリヤさんにとって最も必要なものでした! なぜなら、神様の御用・働きは、人間の知恵や能力で行うのではなく、聖霊様の力で行うからです!

間もなくエリヤさんは、天から迎えに来た「火の車と火の馬」に乗って、天に引き上げられました。エリヤさんをお父さんのように慕っていたエリヤさんは「ああ、わが父よ、わが父よ!」と泣き叫びました。

でも、エリヤさんにはエリヤさんに宿っていた聖霊

様の恵みと力がちゃんと宿っていたのです! その後、エリヤさんは預言者としての働きを立派に引き継ぐ事となるのです。

まとめ

皆さんにイエス様の事を教えてくれたのは誰ですか? お父さん、お母さん、教会の先生ですか。大切な事はその方が教えてくれた「イエス様を信じる信仰」をあなたが受け継ぐ事です! 先輩や先生のマネをするのではなく、あなたはあなたとして、信じる心「信仰」を受け継ぐのです。イエス様を信じる人には全員に、聖霊なる神様が宿ってくださいます!

そして、その次はあなたから誰かにその信仰を渡すのです! そうやって、信仰と聖霊と主の働きは、ずーつと受け継がれていくのですよ。

♪明日に向かいチャレンジ♪(PW58)

聖書 列王下4・1〜7 テーマ エリシャ② 器と油

序論

(小泉 創)

「あなたの口を広くあけよ、わたしはそれを満たそう」
(詩篇81・10) という聖句があります。私はたまにこの聖句を思いながら、口をぽかっと開けてみることはありません。もつと大きくでしようか、主よお満たし下さい、と。ばかばかしいと思われればその通りです。

今日の聖書箇所は、信仰に堅く立ち、一見それが何になるのかと思われることを行い、祝福を受けた人々の物語です。

一、危機の中で

神に忠実に従ってきた一人の預言者が亡くなりました。その妻がエリシャのところへ駆け込んできて、夫が残した借金のかたとして二人の子どもたちが奴隷として売られようとしていると言います。大切な同労者の家族の危機に、エリシャの心はひどく傷んだはずです。神に従って生きる者にも容赦ない現実が襲い掛かってくるこ

とがあります。エリシャには借金を肩代わりするだけの財力はありませんでした。しかし神がエリシャを通して、ご自分を愛する者を救う道を開いてくださいます。危機の中で、神様のあわれみのみわざがあらわされようとしています。

二、神に期待する

エリシャの師であるエリヤは、かつて一握りの粉と少しの油しかもたないやもめの家族と過ごしたことがありました。神による奇跡のわざは、わずかなものをみんな食べても減らないようにしてくださったのでした(列王上17・8〜16)。エリヤの後継者とされたエリシャをも神は豊かにお使いくださいます。

預言者の妻の家にはもはや油一びんしか残されていませんでした。どうしたらここに希望を見出すことが出来るでしようか。しかしイエス様がなされた五千人の給食の奇跡はどうだったでしょう。一人の子どもが差し出した二匹の魚と五つのパンは、弟子たちの目にはなんの足しにもならないと思うようなものでした(ヨハネ6・9)。目の前の困難はあまりにも大きいのです！ しかしイエ

ス様は小さなさげものを用いられて、そこにいたすべての人を満たし、なおあまりあるようにしてくださいました。わたしたちにはこれが何になるだろう、と思われるものでも、神様の手に渡されるならば豊かに用いられます。

エリシャは近所から、あいた器をありったけ借りてくるように告げました。いれるものなどないに等しいのです。それをばかばかしいことと思えばそれまでです。しかし預言者の妻は、指示に従って器をたくさん借りてきました。そしてエリシャの指示通り隠れた場所で子どもたちと一緒に油を器に移しはじめました。子どもたちが次々に器を持つてくると、母親は油をそそぎます。一びんの油が次々と器を満たし、けれども尽きることがないので。備えた器がなくなったときに、油はとまりました。信仰によって備えた分だけ、主は満たしてくださいました。危機的狀況であったこともさることながら、預言者であった夫と共に、妻も子どもたちも主を畏れ、愛し、従ってきた生活があつたからこそ、いざというときに信仰を働かせることができたのでしょうか。

三、神様の満たし

エリシャは、預言者の妻にそれらの油を売って借金を返済し、残った分で今後生活していくことができる、と告げました。主は窮状を乗り越えさせたばかりではなく、これからの生活のための必要をも満たしてくださいました。ですから、加えていうならば、母親と一緒に神の助けを体験した子どもたちは、その後出会う困難の中でも主に従い期待することの幸いを繰り返し思い起こしたに違いありません。これも神がご自分を愛する者たちに与えてくださった祝福でしょう。

結論

誰もが想像できない方法で、神はこの家族を養ってくださいました。私たちが信じている主は無尽蔵の恵みを備えてくださっています。主の恵みを小さく考えず、大きな期待をもつて従う用意をしていきましょう。

研究資料

(加藤 満)

預言者エリシヤはエリヤを通し「霊の二つ分」(2・9)を得た預言者であり、彼の周囲に「預言者のともがら」と称される預言者集団が成立していた。主はエリヤに対しそうであったように、エリシヤと共におられ、「主の手」(3・15)「主の目」(3・18)などが彼に臨んでいた。

エリシヤもエリヤと同様に神の多くの奇跡に用いられたが、この事はそのまま彼らが仕えた時代が如何に霊的・社会的に厳しい時代であったかを示している。しかし主の御業は魂の救いに留まらず、社会領域においても発揮される。この個所はエリヤの「ザレパテでの奇跡」(列王上17・8～16)とイメージが重なる。主はエリシヤを通し、厳しい時代の弱者である主の預言者の一家を経済的な危機から救い出すのである。

テキスト

1 呼ばわって 字義通りに訳すと「叫んで」である。
 あなたのしもべ 身分が上の者への一般的な敬語。ひとりの妻 宗教家としての預言者は社会の中で十分かつ正

当な立場で扱われてきていなかった。しかも主人を失った女性は今更、社会的立場として弱者である。主を恐れる者でありましたが「にもかかわらず」「ワーウ」へブル語接続詞」という反意の語が使用されている。夫は主を恐れていた「にもかかわらず」、子供を奪われるという母親にとって自分の死よりも辛い状況が襲いかかる。この理不尽さをエリシヤへ訴え、主へ訴えている。子供を取って奴隷にしようとしている 本来、同胞を奴隷とすることは律法で禁止されていた(レビ25・39)。

2 一びんの油 旧約聖書中ここに出でくる容器名。おそらく油注ぎ用の小瓶を指す。女性は何もないことを強調するためにこの言葉を用いている。「それほどに何もないのです」。しかし、神の御業は私たちが無いにも等しいと考える小さなものから始められる。

3 器をうあいた器を 油が豊かに供給されることを示すため「隣の人々から」と始まり、後半では語順が入れ替わり「からの器」を冒頭にし、器への注目を促している。少しばかりではいけません 少しばかりではいけません」という否定文は、むしろ最大の肯定的内容を意味している。エリシヤは女性への問いかけと、励ましの言

葉によって彼女の信仰と行動を引き出している。ここで油の量は制限されていない。女性が空の器を多く準備することをつめらわれない限り、神は油を満たし続けるのである。

4 戸の内に閉じこもり 公開しない事を指示されている。しかも、この奇跡はエリシャが不在の場で起きる。これはイエスの姿と重なる（マタイ6・6）。

5 油をついだ 継続表現で「注ぎ続けた」。これは信仰的継続行為を強調している。近しい表現はヨハネ2・7。新改訳2017では「子どもたちが次々と自分のところに持って来る器に油を注ぎ入れた」（5）。子供たちの「運び続ける」という継続行為と母親の「注ぎ続ける」という行為は対照的に表現され、信仰の行為が親と子の共同の行為であることを物語っている。

6 油はとまった これ以上に油の供給が受けられないほどに十分に彼女の必要が満たされた事を指す。

7 負債を払いなさい 貸主の権利を侵害せずに、一家を救う事と、同胞の奴隷売買を防ぐ事にも成功している。あなたの子供たちは 強調表現。主を恐れつつも苦しむ預言者一家に神は奇跡を直接経験させた。母親の一番の

心配を慰め、再び御名を崇めさせる。神は地上の支配者のように救済に手をこまねく方ではない（申命記10・18、ヤコブ1・27）。そして、神が賜るものはしばしば有り余る（マルコ6・43、エペソ3・20）。

神の偉大な働きは小さな所から始まる。主イエスのパンの奇跡、更に言うならば御降誕はその真理を物語っている。私達の愛も能力も小さなものしか持ち合わせていないという事は、献げない事のいいわけにはならない。神は無きに等しくとも、心を込めて献げられたものを通して、御業を進めることを喜ばれる神なのである。

参考図書 ドナルド・J・ワイズマン著、吉本牧人訳『ティンデル聖書注解 列王記』（いのちのことば社）、『新聖書注解 旧約2』（いのちのことば社）、高橋秀典著『哀れみに胸を熱くする神』（いのちのことば社）、他

聖書

列王下4・1-7

タイトル

エリシャ② 器と油

暗唱聖句

あいた器を借りなさい。少しばかりでは
いけません。
列王下4・3

目 標

神の偉大な働きを受け取るために備える
者となる。

導入

(土屋開夫)

夏休みですね。夏は教会の子どもキャンプに行く子もいるかも知れませんね。ちょっと想像してみてください。

「キャンプあるある」です。教会学校の先生は大忙し。

「さあ、キャンプ場に着きましたよ。まずは水分補給をしましょう。先生はちゃんと麦茶を大きなタンクにたっぷり持ってきましたよ。さあてと…ああ、しまったっ！紙コップを忘れてきちゃった…」あらら、残念。

いくら麦茶がたっぷりあっても、コップが無ければ飲めませんね。水やお茶やジュースなどの液体は、当たり前ですがそれを受ける入れ物、つまり「器」が必要です。コップもお茶碗もお鍋も、全部「器」です。

今日の聖書のお話は、この「器」と「油」のお話です。

預言者仲間のピンチ

先週に続いて、預言者エリシャさんのお話です。エリシャさんは、先輩の預言者のエリヤさんから、預言者の働きを引き継いだ人でしたね。この当時、エリヤさんやエリシャさんの他にも、預言者の仲間の人たちが何人もいたようです。みんな、神様の言葉を人々に伝える働きをそれぞれの所でしていました。

そんな預言者仲間の一人がある時、死んでしまいました。その人の奥さんと子ども達は、これからどうやって暮らしていけばいいのか、とても困っていました。お金も財産も無いので、このままでは子ども達が奴隷にされてしまうのです！大ピンチです。

あなたに何があるか

エリシャさんはその奥さんに言いました、「あなたの家にどんな物があるか、言いなさい。」

「何があるかって言われたって何も無いわ…無いから困ってるんじゃないの:」そう思いながらも、改めてよく家を見ると、一つのビンに入った油だけありました。まるでこの一ビンの油は、最後に残っている「わずかな

8月

4日 礼拝メッセージ例

信仰」を表しているようにも思えます。

彼女がその事を言うのと、エリシャさんは「隣の人々から器を借りなさい。あいた器を借りなさい。少しばかりではいけません。」と言いました。

彼女はそれこそお鍋や壺や水がめやら、器なら何でも借りてきたでしょう。そして言われた通り、戸を閉じ、器にビンの油を注ぎました。するとどうでしょう！ どれだけ注いでも油は無くならず、どんどん無限に出てきて全ての器を満たしていききました！ 神様の奇跡です！

彼女は子ども達に「もつと器を持ってきたなさい」と言いました。子どもが「器はもう無くなっちゃったよ」と言うのと、油は止まりました。神様の恵みや力には限りがありませんが、それを受け取る器には限りがあったのです。でも、求めたら求めただけ満たされました。

この油はオリーブ油だったと思いますが、オリーブ油は色々な事に役に立つ貴重なものです。お料理に使ったり、ランプの燃料にしたり、お薬に使ったり、お化粧に使ったり、王様や祭司の頭に注いだり。だから誰もが必要なものです。彼女はこの油をどんどん売って、借金を返し、その後も無事に生活することが出来ました！

まとめ（この奇跡の意味するところ）

さて、この不思議な神様の奇跡は私たちに何を教えているのでしょうか？ 「油」は神様から与えられる全ての恵みや祝福を表しています。そしてそれを受け取る「器」は私たち一人一人です。神様は無限の恵みを私たちに与えたい、注ぎたいと願っておられます。けれどもそのためには、その恵みを受け取る器、私たち一人一人が必要なのです！

神様の最大の恵みは、御子イエス様による罪の赦しと救い、そして聖霊なる神様ご自身です。その他にもたくさん恵みがあります。信仰をもって求める人、「器」がいれば、神様は限りなくその恵みを満たしてくださいのです！ あなたも「器」なんですよ。神様の恵みを受け取ってくださいね！

♪スタンダップ♪（P W 40）

聖書 列王下5・1～14 テーマ 大勇士の癒し

序論

(高橋頼男)

スリヤのナアマンは、大勇士で王にも絶大な信頼を置かれる偉大な將軍でした。しかし、彼には隠れたところに大きな悩みがありました。それは、重い皮膚病にかかっていたことです。これまで、さんざん治療のために手を尽くしましたが、一向によくありません。ナアマンの家には奴隷となっていた一人のイスラエル人の娘がいました。彼女はナアマンの悩みを気の毒に思い、イスラエルには重い皮膚病をいやすことができる神の預言者がいることを語りました。そのことを伝え聞いたナアマンは、さっそくスリヤ王に許しを願い出しました。そして、イスラエルの預言者に会うために王の親書と多くの贈り物を携えてイスラエルの国にやってきました。

一、ナアマンの悩み(1)

〈彼は大勇士であったが、重い皮膚病をわずらっていた〉のです。ナアマンは、表向きは立派な鎧よろいを身に纏まとう大勇士でしたが、その中身、身体は重い皮膚病をわずらっ

ていて、肉はただれ、腐っていたのです。その病は彼がどんな医者にかかり、どんな薬を用いて治療を試みても治らない業病のように厄介な病気でした。だれでも、隠れた内面の悩みというものがあります。自分で隠しているけど、内面は人前にはとてもお見せできないものです。しばしば自分自身を打ちのめし、痛めつけ、苦しみ貫く問題です。私たちも、そのような内面の悩みを抱えていることがないでしょうか。私たちの罪(肉)の問題はまさしくそれです。ナアマンが抱えていた内なる悩みは、私たちが抱えている罪の問題、醜い肉の姿ではないでしょうか。罪は自分では解決できません。何度も試みて失敗してしまいます。肉の問題は、自分の内にさらに深くしみ込み、食い込む内面の問題です。

「わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」(ローマ7・24)と、私たちもパウロと共に叫んだことはないでしょうか。この罪は伝染し、私たちを破壊し、やがて死に迫りやる業病です。「罪の支払う報酬は死である」(ローマ6・23)。この問題の解決はどこにあるのでしょうか。

二、イスラエルには神の預言者がいる(3)

「ああ、御主人がサマリヤにいる預言者と共におられたらよかったでしょう。彼はその重い皮膚病をいやしたことでしょう」。イスラエルから捕えられてきた一少女の言葉は、病に苦しむナアマンにとって暗闇に差し込む光、「福音」そのものでした。なんとしても、どんなことをしても、その神の預言者のところに行つて、親しく出会い、患部に手をおいてお祈りしてもらつて癒していただきたいと切に願ひ、決心してイスラエルにやつてきたのです。「イスラエルには、病を癒す神の預言者がいる…」との一人の小さな者の証しが、大きな働きをなしました。

三、行つて七たび身を洗いなさい(10、14)

神の預言者をようやく探し当てたナアマンは、家の門口に立つて、はるばる訪ねてやつてきた目的を告げます。しかし、取り次ぎのしもべが顔を出すのみで、神の預言者(エリシャ)は会つてくれません。ヨルダンに身を浸し、七度そうしなさいと伝えるのみでした。ナアマンは、怒り心頭です。スリヤの偉大な大勇士である自分がわざわざ王の親書と贈り物を携えてイスラエルにまで来ているのに…。怒つて去ろうとするナアマンにしもべたちが言

いました。「預言者があなたに、何か大きな事をせよと命じても、あなたはそれをなさらなかったでしょう。まして彼はあなたに『身を洗つて清くなれ』と言うだけではありませんか」。そこでナアマンは下つて行つて、神の人の言葉のように七たびヨルダンに身を浸すと、その肉がもとにかえつて幼な子の肉のようになり、清くなつたのです。謙遜と謙りをもつてみ言葉に従ひ、水の中に下つていき、その病によつてただれた身を水に浸すのです。自分が、癒し難い罪をその身に負うものであることを認め、キリストの死と葬りのバプテスマにあずかり、共に死に、共に生きるといふ恵みに思い切つて浸されましょう。キリストの血^ちのきよめ^{あずか}に与りましょう。

「御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである」(Iヨハネ1・7)。

「心はすがれて良心のとがめを去り、からだは清い水で洗われ、まごころをもつて信仰の確信に満たされつつ、みまえに近づこうではないか」(ヘブル10・22)。

結論

隠れた内面的な悩みがあるなら、今こそ謙つて、神のきよめと癒しを求め、神の解決をいただきましょう。

研究資料

(小平徳行)

ここはナアマンの重い皮膚病の癒し(きよめ)の記事であるが、ただ癒しだけにとどまらず回心にまで至った(15)。当時は多くのユダヤ人が預言者の訓告を気にも留めない時代であり、多くの重い皮膚病患者がいたが、誰もきよめられることはなかった。その中で異邦人であるナアマンだけが、預言者による神の言葉に従い、きよめられたのである。イエスはこの事をご自身の郷里の人々の不信仰を指摘する時に語っている(ルカ4・27)。

テキスト

1 ナアマン スリヤでは一般的な名前で「慈悲深い」を意味する。主がかつて彼を用いてスリヤに勝利を得させられた。これは列王上22章のアハブ、ヨシヤパテ連合軍とスリヤとの戦いのこともかもしれない。異邦人も主に用いられる器である(イザヤ10・5、44・28)。重い皮膚病(ハツァーラアト) は旧約聖書においては種々の病気や皮膚病に用いられている。様々の腫れ、かさぶた、白斑、明るいあるいは暗い斑点、かさかさの皮膚などの特徴を伴う。またそれと羊毛、麻、革製品のかびや、壁

の真菌類の特徴も表す。聖書協会共同訳では、特定の病を指す差別的なニュアンスを避け、律法で規定された病という意味合いで「規定の病」と訳されている。

2-3 ひとりの少女 この少女はナアマンの癒しと回心において重要な役割を果たした。彼女はスリヤの略奪隊に捕えられて連れて行かれたが、主に遣わされたといえる。名も無き捕われ人であったが大胆に証しをした。いかなる境遇も福音の前進の機会となり得る(ピリピ1・12)。いやしたことでしょう この章ではこの病について「いやす」と「きよめる」の二つの言葉が使われている。「いやす」という言葉には「動かす、取り除く」という意味がある。つまり病から人を動かす、自由にする、または症状を取り除くということである。重い皮膚病はイスラエルでは宗教的な意味合いで扱われ、「きよさ、汚れ」の問題とされている(レビ13章)が、異邦人にとってはいやされるべき病気として扱われている。

5-6 わたしはイスラエルの王に手紙を書きましよう スリヤの王がイスラエルの王に手紙を書いたのは、預言者も王の支配下にあり、王からの指示で事が進むと思っていたからであろう。銀十タラントと、金八千シケルと、

晴れ着十着 診断を求める際に贈り物をするのは慣例であったが、これは例外的な豊富さであった。

7 イスラエルの王は：衣を裂いて言った 重い皮膚病の癒しは人間的には不可能なものであったゆえに、これを無茶な要求と感じ、戦争の挑発と受け取ったのであろう。ナアマンは膨大な贈り物を携えて行ったが、それでもイスラエルの王の恐れを和らげることはできなかった。

8 どうしてあなたは衣を裂いたのですか エリシャはイスラエルの王の不信仰を指摘している。イスラエルに預言者のあることを知るようになる これはエリシャというよりも彼を通して働いておられる神の存在が知られるようになることを意味している。そして同時に、他の神々が無力であることを示す機会にもなるのである。

11～12 ナアマンは怒って去り ナアマンは自分なりに、どのような方法で癒しがなされるのかを思い描いていた。しかしエリシャの要求はナアマンにとって予期せぬ要求であり、彼が自分の前に姿さえ現さなかったことを無礼に感じたのである。ダマスコの川：はイスラエルのすべての川水にまさるではないか ナアマンが怒ったのは、ダマスコの川がヨルダン川と比較して立派な川で

あるという理由もあるかもしれないが、真の理由は、自分をはりくだらせて神の方法に従うことに気が進まなかったことであつた。ヨルダン川が用いられたのは、癒しは川の水ではなく主がなさるものであることを示している。エリシャの命令はナアマンに謙遜と信仰を教えるためであつた。

13 わが父よ、預言者があなたに、何か大きな事をせよと命じて、あなたはそれをなさらなかったでしょう かしもべたちの訴えは理にかなっていった。ナアマンは自分の病気が重いため、簡単な方法でよいはずがないと思つたのかもしれない。しかしこの病の癒しは困難であり、神の力でなければ不可能であるので、ナアマンが考えるどのような困難な事をしても決して癒すことはできなかったであろう。だからこそ神の恵み以外の方法に期待はできないのである。ナアマンの発想は自分の苦行にたよるもので、福音とは異質であつた。

14 神の人の言葉のように 癒しは神に従うところからくる。七たび 七は完全数。同じことを繰り返すのは信仰が試されることでもあつた。

参考図書 7月21日分と同じ。

聖書

列王下5・1〜14

タイトル

エリシャ③ ナアマン將軍のいやし

暗唱聖句

身を洗って清くなれ。 列王下5・13

目 標

隠れた内面的な悩みのために神の解決を
いただく。

導入

(和田牧子)

「こんなこと、誰にも言えないよ…」という悩みはありませんか？ むしゃくしゃした時、大人の見ていないところで弟や妹にあたってしまうとか、「もうやめなくちゃ」と思いながらも、どうしてもやめられないこととか…。今日は、かくれた悩みを解決していただいた人のお話ですよ。

大勇士ナアマンの悩み

「苦しい」（涙）。今日もスリヤの国の將軍がうめき声を上げています。彼の名はナアマン。主なる神様の力によって自分の国に勝利をもたらした、立派な將軍さんです。でも、見るからに強そうな外の姿からは想像もできない悩みが、隠れたところにあったのです。実は、身体中の皮膚がただれて痛くて、ものすごく苦しい病気を

持っていたのです。「こんな痛さなんてへっちゃらだ」と何度言い聞かせても、我慢できないほど苦しいのです。大変な病気ですね。

皆、ナアマンがそんな隠れた悩みを持っていることを知りませんでした。でも、彼の妻に仕えているユダヤ人の少女だけはわかっていました。彼の病気の重さも、そして、それを誰がいやせるのかも。少女はナアマンの妻に言いました。

「ご主人様は、サマリヤにいる預言者のところへ行かれたらよろしいのに。きっと、その方が重い皮膚病を治してくださいますよ」。

預言者エリシャのことばの通りに

少女の一言がきっかけで、まもなく、イスラエルの預言者エリシャのことを知ったナアマン。たくさんのお贈り物をもって、王様にお手紙も書いていただいて、ついにエリシャのお家の前までたどり着きました。ところがお家から出てきたのはエリシャではなく、その使いの者でした。

「ヨルダン川へ行って七回身体を洗いなさい。そうすれば、あなたのからだはもとのように治って清くなるで

しょう」。

「なんだと〜!? 預言者がじきじきに出て来てあいさつし、手をあて、主の名を呼んで、治してくれると思っていたのに。ヨルダン川で洗えだど? それなら、自分の国に流れている川のほうが、よっぽどきれいだ」。

かんかんに怒ったナアマンは、来た道を引き返そうとしました。その時、ナアマンのしもべたちが追いついてこう言いました。「ご主人様、あの預言者に、何か難しいことを言われても、そうなさったのでしょうか。それなら、『身を洗って、きよくなれ』と言われただけのことですから、そのとおりになさったらいかがですか?」

「うん、それもそうだな。よし!」氣を取り直したナアマンは、ヨルダン川へ下って行き、言われたとおり、七回、水につかりました。すると、どうでしょう。皮膚は小さい子どものようにつやつやし、すっかり治ったのです。エリシヤをとおしてまことの神様がいやしてくださったのですね。

隠れた悩み

大勇士ナアマンでさえ、かくれた悩みがありました。同じように、かくれた悩みがあってもどうか安心してく

ださい。神様はあなたの悩みを良く知っていてくださって、解決したいと願ってくださっています。学校でいじめられていてとても辛いんだとか、お家の人が自分の気持ちをわかってくれないと感じるときはありませんか? どうかひとりで悩んでいないで、教会の先生と一緒に神様にお祈りしてみしましょう。神様が必ずあなたの心に届いてくださいますよ。

結び

そして、どうか忘れないでください。かくれた「罪」も、そのままにしておいてはだめだということです。

「イエス様を信じるだけできよくされるなんてばかばかしい!」と思うかもしれません。しかしそれでは、せっかくの神様の赦しが自分のものにならないままです。ナアマンが、預言者エリシヤに言われたとおりにしたように、神様が定めてくださった方法のとおりにすれば良いのです。「イエス様の十字架は多くの、私のためでした。イエス様、〇〇の罪を、お赦してください。み子イエス様の血がすべての罪をきよくしてくださると信じます」とお祈りすれば、必ず赦され、きよくしていただけます。

♪フリー♪ (イン40、PW56)

聖書 ヨナ1・1-17 テーマ 神の前を離れて

序論

(石田高保)

ヨナの預言者としての行動には不従順があり、筋が通っていたとは言えません。しかしそれでも主はあきらめずに彼を用いました。そのように私たちにも関わっておられると見ることができます。

一、神から離れようとする人

〈立つて、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって呼ばわれ〉、つまり悔い改めを宣べ伝えよと主からお声がかかった時、ヨナはどうして受け入れることができませんでした。なぜならヨナの国イスラエルは、その北方に位置するアッスリヤに圧迫されており、ニネベはその首都だったからです。ヨナがその町に神の言葉を伝えて人々が悔い改めもしたら、敵を救うことになってしまうことを恐れました。そこで反対方向のタルシシへ船で渡ってしまおう、そうすればこの従いたくない使命から逃れられると考えたわけです。

渡りに舟とばかりに、〈ちようど、タルシシへ行く船が

あったので：乗った〉。自分の願ったように事の運ぶことが、必ずしも主のみどころとは限らないことがあります。むしろその反対を行く誘惑であるかもしれません。ヨナの場合には三度も〈主の前を離れて〉と書かれてしますから、それがかつきりしています(3、10)。しかし主は私たちが大きな過ちをしないように、み言葉や助言者を備えておられます。

人間は神様に与えられた自由意志によって、神の言葉に従うことも、従わないこともできます。神様は人間を強引に従わせることはなさいません。しかし神様は摂理の中でみ言葉に従い、祝福にあずかるようにと道備えをなされます。〈主は大風を海の上に起された〉のもその一つの現れです。

二、追い求める神

〈わたしは海と陸とをお造りになった天の神、主を恐れる者です〉という告白に船乗りたちが震え上がったのは、ヨナが海を支配する神に背いたことを悟ったからです。そして〈あなたはなんたる事をしてくれたのか〉と、異邦人たちから過ちを責め立てられては、ヨナも恥じ入り、ついに本当のことを言いました。〈この激しい暴風があなたが

たに臨んだのは、わたしのせいです、ヨナは、この絶体絶命の状況を招いたのは、自分が主の命令にそむいて逃げたせいであることを自覚しています。当時の船乗りたちは、人を海に投げ入れて神々への犠牲とすれば、その怒りがなだめられて暴風が収まると信じていました。それを知っていたヨナは自分を犠牲にしてくれと申し出るのです。船乗りたちはできるだけその手は使いたくなかったので、船をこいで陸に戻ろうともがきました。しかし万策尽きたとき彼らはやむを得ずヨナを海に投げ入れました。するとたちまち大嵐が嘘のように静まりました。これには船乗りたちも恐れおののき、ヨナの主がまことに天地を造られた神だと認めざるを得ませんでした。皮肉にもヨナの不従順な行動を逆手にとって主が栄光を表されることとなりました。

いっぽう海に投げ込まれたヨナと言えば、思いがけない方法で命拾いします。主は大いなる魚を備えて、ヨナをのませられた。しかも三日三夜その魚の腹の中で生かされ、おそらく元の海岸まで運ばれて生還します。主は大嵐を起こしてヨナを危険にさらすだけではなく、大いなる魚を用意して彼の命を救われました。一見ありえないことのようにですが、イエス様はご自分が死人の中から三日目によ

みがえると預言するにあたって、ヨナの出来事を引き合いに出しておられることから、まぎれもなく神の奇跡であることがわかります(マタイ12・40)。ここにはどんな方法を使ってもヨナを預言者として用いて二ネベの人々を救おうとする主の熱心が表れています。同じように自分を愛するように身近な人を愛し、福音を伝えるという使命のために用いられない人はいません。主は私たちを何度でも働きに招いて下さるのです。

結論

神様の前を離れる、それはあつさり、あるいはぎりぎりのところで神の言葉よりも自分の思いを選び取ってしまう傾向と言えるでしょう。また神様の使命に従いきれない心の状態を指しているのかもしれない。しかし私たちは聞こうとさえすれば神の声を聞くことができます。聖書を読んでいる人、メッセージを聞いている人は、すでに神の声を聞いていると言えるでしょう。あとは従う仕事だけが残っています。それは誰も代わることができません。しかし神の声を聞いて従うという営みには、必ず祝福があります。その人はいつも喜んでいられるだけでなく、身近な人に良い影響を与えるようになります。

研究資料

(小平徳行)

本書には異邦の民をあわれむ神の愛と共に、一人の預言者ヨナを忍耐強く取り扱われる神の愛が描かれている。

テキスト

1 アミツタイの子ヨナ ヘブル語で「鳩」という意味。列王下14・25によれば、ヨナはヤラバーム2世の領土拡大について預言した北イスラエルの預言者として登場している。父親の名が同じであることから、本書のヨナと同一人物であると考えられている。

2 ニネベ ティグリス川東岸にニムロデによって築かれ(創世記10・11)、メソポタミヤにある最古の町の一つ。アッスリヤ王国の主要都市でセナケリブ王によって首都と定められた。後にメデイヤとバビロン連合軍によって滅ぼされる(BC 612年)。向かって(ヘ)アル この前置詞は何かに「逆らって」という意味があり、異教の地ニネベに対する宣教の厳しさが表されている。預言者ヨナの使命は異教の民ニネベの罪に対して立ち向かい、彼らに罪の悔い改めを訴えることであつた。

3 ヨナが使命を放棄した動機はニネベの宣教の困難さより、4・2のヨナの告白から分かるように、彼の宣教によってニネベが悔い改め、神が災いを思いかえされるのではないかという恐れからであつた。ニネベはイスラエルにとつて脅威となるため、ヨナとしては滅びることが望ましかつたのである。彼は臆病だつたのではなく、偏狭な愛国心から神に従わなかつたと思われる。しかし、理由はどうであれ、主の命令に従わなかつたことは良い事ではない。タルシシ どこを指しているのかは諸説あるが、通常は現在のサルジニアか、あるいはスペイン南部のタルテスと同定される。ここはヨナの時代のヘブル人たちに知られていた最も遠く離れた貿易相手であつた。いずれにせよタルシシは海を隔てた遠隔地であり、「世界の西の果て」という響きを持つ表現としても用いられている(詩篇72・10、イザヤ66・19)。ヨナがタルシシ行きの船に乗り込んだのは、神の召命を逃れて、でさるだけ遠方に行こうとしたためである。ヨツパ(ヘ)ヤツフォ) 地中海沿岸にある港町で、エルサレムの北西56kmにある。現在はテル・アビブと合併。

4・5 神への不服従は当人だけでなく、周囲の人々に

も損失をもたらすことがある。**めいめい自分の神を呼び求め** 水夫の国籍が様々であったのか、またはフェニキヤなどの多神教国の民で、各自の守護神がいたのかもしれない。**積み荷** (ヘ) ケーリーム) ただの荷物だけである、船具をも指す。事態がいかに切迫していたかを思わせる。**船の奥に下り** 現実から少しでも遠くへ逃れようとする試みであり、神からの逃避であった。ヨナは嵐の原因が自分を知っているながら、あくまでも神から離れようとする愚かな試みであった。

7 くじを引いて 直訳は「くじを落とす」。くじ (ヘ) ゴーラール) はアラビヤ語の石と関連のある語であることから、いくつかの小石が用いられて、ある特定の一つが落ちることによって決められたのであろう。くじで神のみこころを知ろうとするのは、ユダヤ人を含め、広く古代の人々の間で用いられていた。旧約聖書でも多くの例があり、正当な方法とされていたことが分かる。

9 ヘブルびと イスラエルの民が他の異教の民との区別を意識した呼称。**海と陸とお造りになった天の神** 今、海が荒れているのは、この神の怒りのゆえであることにヨナは気づいていた。

10 はなはだしく恐れて 水夫たちがひどく恐れたのは、イスラエルの神が自分たちの神々とは比較にならないほど恐ろしい神であるという認識によるものであった。**12 わたしを取って海に投げ入れなさい** ヨナには荒天の原因になって自分がこの船にいないければ、船は助かるに違いないという確信があった。

13 ヨナに同情した船員は、何とか彼が犠牲になることを避けようとして、舟を陸に戻そうとしたが、不可能であった。 罪の赦しは犠牲なしにはあり得ない。

16 この異教の民の反応は、彼らのうちに、イスラエルの神に対する畏敬の念が起こされたことを示している。

17 大なる魚を備えて、ヨナをのませられた これが歴史的事実でないとする解釈や、類似の事件が実際に起こったことを指摘して、信ぴょう性を裏付けようとする論議も展開されてきたが、類例が見いだされなくても、全能の主がなされた超自然的御業と考えるべきであろう。

参考図書 鈴木昌「ヨナ書」『新聖書注解・旧約4』(いのちのことば社)、勝原忠明「ヨナ書」『実用聖書註解』(いのちのことば社)、W・R・トンプソン「ヨナ書」『ウエスレアン聖書注解・旧約篇4』(イムマヌエル綜合伝道団) 他

聖書

ヨナ1:1~17

タイトル

神の命令に背いたヨナ

わたしは海と陸とお造りになった天の

神、主を恐れる者です。

ヨナ1:9

目標

神に背いて歩むことの災いを覚え、神に従う者となる。

導入

(松浦みち子)

皆さんはおうちで、どんなお手伝いをしていますか？
食事の時に、お皿を並べたり、後片付けを手伝いますか。
また、洗濯物をたたんで整理したり、お風呂の掃除をする
子もいるかな？ お手伝いを頼まれたとき、「はいっ！」て
する時もあるでしょうが、いやだなあと思ってサボっちゃ
うときもありますか？

今日は、神様からのお手伝いを、「いやだよ」と言って逃
げだした人のお話です。

神様の命令を拒むヨナ

その人の名はヨナと言います。この名には「鳩」という
意味がありますが、全然鳩のように素直ではありません。
頑固なイスラエルの預言者でした。ある日、神様はヨナに

「立って、あの大きな町ニネベに行き、わたしのことを伝
えなさい。あの町の人々は悪いことばかりしている。この
ままでは滅びてしまう。神様を信じ、悪い事をやめるよう
に伝えなさい」と、言われました。「えっニネベなんてとん
でもない！」ヨナは神様の命令を拒みました。なぜなら、
ニネベの町は、アッシリヤ帝国の首都でとても大きな町で
した。強固で乱暴で残忍な国だったので、アッシリヤの国
は周りの国々から怖がられていました。しかも、やがてイ
スラエルを滅ぼし、全てのものを奪い去ってしまうと預言
されていた国だったのです。ヨナはそんなニネベの町に行
きたくありませんでした。「悪い事ばかりするアッシリヤ
の人々は滅んでしまえばいいんだ」と思っていたのです。
しかし、神様のお心は、そのような悪い事をするニネベの
人々たちも救われることを願っていらっしやったのです
ねえ。

そこで、ヨナはそのような神様のお心に納得がいかず、
神様の命令には従いたくない、逃げようと考えたのです。
ヨッパの港に着くと、そこに丁度タルシシ行の船がありま
した。「おつ、これはよい具合だぞ」と、船賃を払い船に乗
り込みました。タルシシはニネベとは全く逆方向の港だっ

たのです。「あーあ、これでひと安心。疲れたわ」と船底に下りていって「グーグー」といびきをかいて眠ってしまいました。

思いがけない大あらし

ところが、しばらくすると海に大風が吹いて大荒れになりました。さっきの青空は一変して、ピューピューと激しい風が吹きつけ、船は木の葉のように揺れ、今にも沈みそうです。ザッブーン。大波が甲板を洗います。「わあ、船があぶないぞ！ このままでは沈んでしまう」。「さあ、ぐずぐずしないで荷物を捨てろ！」みんな真っ青になって、口々に「おお、神さま、助けて下さい」と叫び声を上げています。ところがヨナは船底であいも変わらずグーグー寝ているではありませんか。人々は「こんなに海が荒れるのは、誰かのせいにかがいない！」「そうだ、くじ引きしてみよう」と、全員でくじ引きしました。眠っているヨナのところにもくじが回ってきました。「さあ、起きてください。くじ引きですよ」。「うーん、むにやむにや。どーれ」「ややや！。当たったぞ。いったいあなたは誰か。何をしたのか。」「ごめんなさい。わたしはヘブル人です。わたしは海と陸をお造りになった天の神、主を恐れる者です」。ヨナは自

分が神様の命令に背いて逃げてきたことを話し、「どうぞ、わたしを海に投げ込んで下さい。そうすれば風は止むでしょう」。かわいそうですが、しかたありません。人々は「それ、1、2、の3」、ボーン、ザッブーン、ブクブクブク。ヨナは見る間に海に沈んでいきました。なんと、大荒れの海はたちまち静かになり、人々は神様の大きな力に驚きました。

神様の備え

さて、ヨナはどうなったのでしょうか。溺れて死んだのでしょうか。いいえ、神様は大きな魚を備えて、ヨナを飲み込ませたのです。「バクツ」「あれー、ここはどこだろう。何だかぬるぬるするなあ。これって、わかめ？ あつ、こは魚の腹の中だ！」ヨナは「神様、助けて下さってありがとうございます。ご命令に背いてごめんなさい。これからは、神様のおことば通りにいたします」と心から謝りました。神様はなんと隣み深いお方でしょう。背いたヨナを見捨てずに、魚を備えて助けて下さいました。私たちは、ヨナのようにではなく神さまを恐れ、素直に「はいっ」と従う者になりましょう。

♪ヨナ、ニネベに♪（イン旧135、救いの聖歌36）

聖書 エレミヤ1・1～10 テーマ エレミヤへの召し

序論

(石田高保)

エレミヤはユダの祭司の家系に生まれた人で、預言者として半世紀に及んで活動しました。その間にイスラエルの大事件であるバビロン捕囚がありました。彼はそのことを正確に預言しています。今日の箇所は彼が預言者として召されたときの出来事を記しています。およそ二十歳くらいの時と考えられます。

一、神の召しの確かさ

エレミヤにある日、神様の召命のことばが臨みます。〈わたしはあなたをまだ母の胎につくらないうちに、あなたを知り、あなたがまだ生れないさきに、あなたを聖別し、あなたを立てて万国の預言者とした〉という言葉には目を見張ります。エレミヤの預言者としての召しは、彼が生まれる前に定まっていたということです。いわば天職ということになるでしょう。神様の主権により、エレミヤには預言者になるかどうかという選択の余地はありませんでした。彼の生家は由緒ある祭司の家系で、そこに神様の摂理が働い

ていたと考えることもできるでしょう。「神はわたしたちを救い、聖なる招きをもって召して下さったのであるが、それは、わたしたちのわざによるのではなく、神ご自身の計画に基」づいています(Ⅱテモテ1・9)。そのように見ると自分の意志を働かす余地がなく、とても不自由に見えますが、別の観点からすると彼の預言者としての務めは神様の強力な保証と責任のもとに行われるということになります。彼は神様の特別な働きのために聖別されました。まさに「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである」(ヨハネ15・16)とあるとおりです。イエス様が弟子を選ばれるとき、相手に相談することはなく、一方的にお選びになっています。

ところが神様の召しに対するエレミヤの応答は、〈ああ、主なる神よ、わたしはただ若者にすぎず、どのように語ってよいかわかりません〉というものです。彼の本心はこのとおり、全く自信のかけらもありませんでした。イエス様の母マリヤが受胎を告知されたときの反応に通じるものがあります。しかし神様の声がたたみかけます。〈あなたはただ若者にすぎないと言ってはならない〉というものです。神様にとって若いかわたしは問題ではないように

す。むしろ若いことによつて長期間にわたつて預言者として働くことができることを神様は見越しておられたのでしょう。〈彼らを恐れてはならない、わたしがあなたと共にいて、あなたを救うからである〉と神様は命令するだけではなく、臨在の保証をもつてエレミヤを励ましておられます。

さらに神様はリアルな幻によつてエレミヤの預言者としての務めを確定されます。それが〈主はみ手を伸べて、わたしに口につけ〉るといふ行爲です。神ご自身が手を伸べてエレミヤの口に触れてくださいました。神様が彼にそのつど預言を与えると保証してくださいださるといふ意味です。これはひるむエレミヤへのだめ押しです。彼はついに降参し、主の召しを受け入れました。これ以降の彼の言葉には神の力が与えられます。〈見よ、わたしの言葉をあなたの口に入れた〉このことがあつてから、エレミヤが主の霊に満たされて語る言葉は、神様からの預言となりました。〈あなたに…抜き…こわし…滅ぼし…倒し…建て…植えさせる〉と、神の權威によつて語る言葉が現実生きて働くことを保証したものでしょう。

二、私たちへの神の召し

では、現代において神様の召しはどのような形で行われるのでしょうか。まず人が救われるということにおいては神様の召し（招き）が大前提です。人はその上に意志を働かせてイエス様を受け入れ、救われるのです。

また信徒として教会の様々な働きへの召しというものがあります。それぞれの奉仕は誰かから頼まれたからするという前に、その背後に神様からの召しがあることを覚えて、畏れの心をもつて行いたいものです。

さらに教会の枠を超えて、日常生活での召しというものもあります。家族や職場の人や友人、地域の人に仕えるという召しです。自分を愛するように隣人を愛することを実践する場です。それは証しの生活であり、折に触れてイエス様を伝えることでもあります。

また牧師、伝道者、宣教師への召しというものがあります。牧会、伝道、教会開拓のためです。いわゆる直接献身への召しというもので、胸の内に神様からの召しを覚えたら、み言葉を求めて確信を得ましょう。

結論

神様の召し、それは神様の保証による確かなものです。それに従う人に愛と知恵と力を与えてくださいます。

研究資料

(金井由嗣)

時代背景

南王国ユダの王ヨシヤの第13年(紀元前627年)から、バビロニア軍によってエルサレムが陥落した紀元前587年までが、エレミヤの預言活動がなされた期間である。

(1) 宗教的背景

ヨシヤ王の第18年に神殿から律法の巻物が発見され、それに基づく宗教改革が実行された(列王下22～23章)。この改革の内容から、その時発見された書物は「申命記」であったと考えられている(申命記改革)。ヨシヤ王の改革は彼の死によって中断し、イスラエルは再び偶像礼拝を許容する王たちの支配を許し、国の滅亡に至る。その中で、主との契約に立ち返ることを主張し続けた預言者が、エレミヤであった。

(2) 政治的背景(列王下23～25章、ファイファー参照)

東方のアッシリア(後にバビロニア)と南方のエジプトという二大帝国に挟まれた小国の悲哀を味わっていたのがユダ王国であった。ヨシヤ王は宗主国アッシリアへの忠誠の証としてエジプトの大軍に挑んで戦死した。エ

ジプトに擁立されたエホヤキムは、バビロニア軍が迫るとその傘下に入ったが、後にまたエジプト側に付いたためにバビロニア軍の攻撃を受ける中で死去し、後を継いだエホヤキンは捕虜となってバビロンに連れて行かれた。ゼデキヤが王となったが、国内では親バビロニア派と親エジプト派が主導権争いを続け、最終的にエジプトを選んだためにバビロニアの攻撃を受けてエルサレムは陥落し、国は滅んだ。この複雑な情勢の中でエレミヤは、国の滅亡を宣告して、バビロニアに降伏し、捕虜となつて、連れて行かれた先で主への信仰を回復するようにと、王と民に勧めた。彼の言葉はゼデキヤ王やその周囲の人々に嫌われ、神の民の敗戦と滅亡という予告を受け入れない民衆からの反感にさらされた。

テキスト

1 ペニヤミンの地アナトテの祭司 ダビデ王のもとで祭司だったアビヤタルは、ソロモンによって罷免されアナトテに住んだ(列王上2・26)。地方の祭司職がエレミヤの家系であった。ところが主は、彼を祭司としてではなく預言者として召されたのであった。

4 主の言葉がわたしに臨んで言う 彼が預言活動を開

始したヨシヤ王第13年に語られたものであろう。

5 三つの動詞で簡潔に、エレミヤへの召しが語られる。
 知り、：聖別し、：（預言者と）した いずれも完了相であり、「母の胎につくらないさきに」「まだ生れないさきに」との言葉と合わせて、この召命が神の側では決定済みであったことが宣言されている。万国の預言者 新改訳は「国々への預言者」、新共同訳は「諸国民の預言者」。エレミヤの預言がイスラエル民族の枠を超えて他の諸民族にも向けられていくことを告げる。

6 ただ若者にすぎず 召された時のエレミヤは若かったことが分かる。まだ十代だったと考えて良い。どのように語ってよいか知りません は彼の本心であろう。

7 ただ若者にすぎないと言ってはならない 神の召命は、人間の事情に優先する。だれにでも、すべてわたしがつかわす人へ行き、あなたに命じることがみな語らねばならない エレミヤは相手の身分や立場に関係なく、神の言葉を、權威をもって語らなければならない。

8 彼らを恐れてはならない 特に王や祭司といった支配階級の罪を断罪する彼の預言活動は、恐れを抱いて当然のものであった。わたしがあなたと共にいて、あなたを

救うからである 人への恐れに打ち勝つ拠り所は、神の臨在の信仰である。

9 わたしの言葉をあなたの口に入れた 預言者の言葉は、神ご自身の言葉である。

10 万民の上と、万国の上に 「万民」は5節の「万国」と同じ単語。「万国」は「諸王国」と訳せば良い単語。前者は民、後者は支配者に焦点を当てた表現である。あるいは抜き、：あるいは植えさせる 6つの動詞でエレミヤの預言がもたらす結果を表すが、破壊的な動詞が4つ、建設的な動詞が2つである。エレミヤに与えられた預言は「破壊の後の回復」を告げるものであり、厳しいメッセージであった。支配者も、民の多くも、もつと聞き心地のいい預言を聞いたがった。しかし現実には国が滅んだ後で、亡国の民の心の支えとなったのはエレミヤの真実な預言だった（ダニエル9・2）。

参考図書 マグラス『エレミヤ―真実の預言者』、服部嘉明（新聖書講解シリーズ）、ハリソン（ティンデル）、クレメンツ（現代聖書注解）、ラハ（同スタディ版）、ファイファー『旧約の歴史』。

聖書

エレミヤー・1〜10

タイトル

神様の呼びかけに従うエレミヤ

暗唱聖句

あなたはただ若者にすぎないと言ってはならない。
エレミヤー・7

目標

神の召しを覚え、召しに従う者となる。

導入

(松浦みち子)

皆さんは、毎日の生活の中で、どんなことを考えたり、思ったりしながら過ごしているのでしょうか。友だちや学校、部活のことですか。また、将来の夢について考えている子もいるでしょうね。「僕は大きくなったら、スポーツ選手になりたいな。」「お医者さんになって病氣の人を助けるんだ!」「わたしは、保母さんよ。でも、ケーキ屋さんにもなりたくないな。」っていろいろな夢を心に描いていることでしょう。

今日は、自分のなりたい将来の夢とは違って、神様からの呼びかけを聞いて神様のために働いた人のお話をしましょう。

神様に呼ばれる

イスラエルの国の人々は、神様に選ばれ愛されてきた

人々ですが、時代の移り変わりとともに、まことの神様を忘れて、偶像を拝み、自分かつてに生きるようになりました。そんなイスラエルの人々の現状を神様は天からご覧になりました。そのために神様はイスラエルに裁きをくだされ、外国がイスラエルを攻めるようにされました。その結果、イスラエルは北王国と南王国に別れてしまったのです。そしてやがて、北イスラエル王国はアッシリヤという国に滅ぼされてしまいました。もう一つの南王国ユダはヨシヤ王が国を治めていましたが、バビロンという力を持った国に狙われていました。そして、やがての時、南王国も滅ぼされて、神殿は壊され、人々はバビロンという国に捕囚として囚われるという運命が待ち受けていました。

丁度そのころ、エルサレムの北方にある田舎のアナトテ村の祭司の家庭に男の子が誕生しました。お父さんの祭司ヒルキヤはこの子をエレミヤと名づけました。神様はこのエレミヤに目を留めて、ある時、まだ年の若いエレミヤを呼んでこうおっしゃいました。

「エレミヤよ。わたしは、あなたがお母さんのおなかのなかにいる前から、あなたをよく知っています。あな

たは預言者となつてわたしの言葉を人々に伝えなさい。」
 エレミヤはびっくりしました。「ええっ！ とんでもありません。神様、わたしはまだ若くて、どのように話してよいかわかりません。」すると神様は、「あなたは若くてできない、と心配しなくても大丈夫です。わたしがあなたに話すことを教えます。だからあなたはわたしが『行きなさい』という所へどこにでも行って、わたしが『話しなさい』ということを全部語りなさい。恐れはいけません。わたしはあなたといつも共にいて、必ずあなたを守り助けます。」と約束して下さいました。

神の任命

神様は、エレミヤに目を留めて呼びかけ、預言者としての働きに召して下さいたばかりでなく、エレミヤの口に触れて、「わたしの言葉をあなたの口に授けた。」とおっしゃいました。そして、「わたしは今日、あなたをもろろの民と王国の上に任命します。わたしがあなたに授けた言葉を持って、あなたは預言し、ある国を引き抜き、こわし、滅ぼし、倒し、建て、植えるのです。」とおっしゃいました。

神様のための働きは、エレミヤが頭がよくて、力が強

くて、りっぱだからできるものではありません。エレミヤを呼び、召して下さった神様ご自身が、必要な力も知恵も与えて助けて用いてくださるのですね。このようにしてエレミヤは、神様に選ばれ、神様からの任命を受けて、預言者としての働きを始めたのです。

わたしたちも主に従おう

皆さん一人ひとりにも、神様は声をかけてくださいます。あなたが、イエス様の呼びかけの声を聞いた時、「はい！」って従う人になることを神様は願っておられます。聖書には、神様の選びについてこう書いてあります。「人間的には、知恵のある者が多くはなく、権力のある者も多くはなく、身分の高い者も多くはいない。それなのに神は、知者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選び、…この世で身分の低い者や軽んじられている者、すなわち、無きに等しい者を、あえて選ばれたのである」(Iコリント1・26～28)。神様の呼びかけに従う者となりましょう。神様が共にいて下さいますから！

♪主にしたがいゆくは♪ (ホ87)

聖書 ダニエル6・1～24 テーマ 神礼拝を貫く

序論

(高橋頼男)

国の法律に反して、神への祈りをやめなかったダニエルは、ついにししの穴に投げ込まれました。しかし神は、ししの口からダニエルを守られました。神の守りとは、どのような人に与えられるのでしょうか。

一、神の御前に祈る人(10)

ダニエルは、彼を妬む者たちの謀略の文書に王が署名したことを知っていました。にもかかわらず、家に帰り、エルサレムに向かって開かれた屋上の窓もそのままに、へ以前からおこなっていたように、一日に三度ずつ、ひざまをかめて神の前に祈り、かつ感謝したのです。

すべてのことを知りつつ、あえていつもと同じように、信仰の良心に従って祈りをささげました。揺るぎない確立された神の御前の生活を、日々生きる聖徒の姿に、私たちは驚きと感動を禁じ得ません。何と力強い堅固な信仰でしょうか。ことあるごとに恐れ、迷い、信仰が揺れてしまう私たちにとって眩いばかりです。

ダニエルの祝福された人生の秘訣は、神礼拝と祈りを第一とする生きかたを貫き通したことです。それは、どんな時、どんな状況の中でも揺るがずぶれず、変わらないのです。

今日、私たちもダニエルのように、祈りと礼拝生活において、神第一を貫く決意をする必要はないでしょうか。世の激しい逆流に立ち向かい、偶像礼拝が支配する霊的暗闇の世にあつて、揺るがぬ信仰を確保し、キリストの証人としての生活を自由、大胆に生きるためです。

二、神の前に正しくよい人(22)

ダニエルは、王の前に、自分が神の御介入による奇跡によってししの穴から助け出された理由を説明して言いました。これはわたしに罪のないことが、神の前に認められたからです。王よ、わたしはあなたの前にも、何も悪い事をしなかったのです」と…。

ダニエルは、神の前に罪を犯さず正しい清い生き方をしました。さらに、人の前にも誠実であり、忠実な働きをなし、彼の生活には公私において何の裏表もありませんでした。ですから、敵でさえも、彼の内には何らの不正も怠慢も欠点も見つけ出すことが出来なかったのです。

しかし、正しく清い生き方がこの世の人々に必ずしも受け入れられるわけではありません。むしろ、ダニエルのように煙たがられ、あらぬ批判を受け、憎まれ、迫害を受けるのがこの世の常です。

人となられた主イエスの歩みはまさしくそのとおりでした。私たちもクリスチャンとして神の前に人の前に清く真実に生きることを恐れてはなりません。そして、この世において誤解され、批判され、憎まれることをも覚悟しなければなりません。いえ、そこにこそ私たちの使命があるのです。義のために迫害されるものこそが、地の塩、世の光となるのですから（マタイ5・10～16）。

三、神に信頼する人（23）

ダニエルがししの穴から出された時、その身に何の害も受けていませんでした。（彼が自分の神を頼みとしていたから…）とあります。これはダニエルがかなり高齢になってからの出来事です。若き日にバビロンに捕囚として連れて来られた時から約七十年、終始一貫、主に信頼し続けてきたダニエルの信仰の姿がそこにあります。

ダニエルは、異邦の国、偶像崇拜の民の中で、奴隷の民として生きて来ました。人がどう思い何と言おうが、

世間がどういう態度をとろうが、自分が信頼する神の御前に忠実に生きました。それが、異邦社会における彼の処し方でした。そのため、どんな迫害や苦しみを受けるかは、ダニエルにとって全く問題ではありません。ダニエルの神への深い信頼、ひたすら神に仕える忠実な信仰の生き方は、全く揺るぐことがなかったのです。

ダリヨス王は「生ける神のしもべダニエルよ、あなたが常に仕えている神はあなたを救って、ししの害を免れさせることができたか」と言っています。王は、ダニエルの信仰を通して、そば近く仕えるダニエルが礼拝している神、彼が信頼する神こそが、真の神、全能の神であることに気づいていたのです。この出来事は、神に信頼する者に与えられる試練が、かえって周囲にどんなに大きな恵みの機会となるかを教えています。

結論

偶像の国バビロンの政治の中枢に生きたダニエルの信仰と生活は、異教社会の日本に生きる私たちにとって、確かな示唆と励ましを与えます。揺るぐことのない一貫した祈りと神礼拝、神と人の前に清い誠実な生き方の秘訣は、彼の神に対する絶大な信頼にあったのです。

研究資料

(中島啓二)

この個所のメッセージは、神により頼む者は、必ず現実の死のわなから守られるということではない。現実には、教会の歴史を通して多くの殉教者がいる。大切なことは、自分の望むとおりにことが進むのではなく、神を中心とする見地に立つて生きることである。死から解放されるか、そうでないのか、それは神の御手の中にあることであって、いづれを通してでも、神の栄光があらわされ、神の計画が前進することこそが重要なのである。

この書の最終章では「その時…あの書に名をしるされたる者は皆救われます」(12・1)と、究極の救いが約束されている。ししの穴から救いは、来るべき究極の「死の穴」からの救いを先取りし、約束するものと言えよう。

テキスト

1〜3 王は彼を立てて全国を治めさせようとした王がダニエルを、総督たちはもとより、他の二人の総監よりも勝る立場に抜擢したことが、ねたみを引き起こした。
4〜5 ダニエルの神の律法に関して、彼を訴える口実を得るのではければ、ついに彼を訴えることはできない

敵対者たちがダニエルを陥れるためには、その信仰心を利用するしかなかった。

6〜9 今から三十日の間は、ただあなたにのみ願い事をさせ：彼らの王に対する敬意は表面だけで、実際は己の欲望のためだけに王の権威を悪用するものであったが、これはダニエルが、王に背く／背教するのいづれを選んでも、彼を窮地に追いやれる巧妙な法案であった。

10 署名された ダニエルを排除しての建議は不正な方法であつたが、それでも王が署名したならば有効であることを、ダニエルは知っていた。二階のへやの…窓の開かれた所で 祈りがもてはやされるときには隠れて祈るべきであるが(マタイ6・6)、禁令のもとで隠れて祈るなら、神よりも世の権力を恐れることになる。以前からおこなっていたように よってダニエルは以前からの祈りの習慣を変えなかった。一日に三度ずつ、ひざをかがめて神の前に祈り 朝と夕の一日二回、立つて祈るのが一般的であつたが(歴代上23・30)、彼が一日三回、ひざまづいて祈ったことは、特別な厳肅さ、祈りの必要性、そして謙遜を示すのだろう(列王上8・54、エズラ9・5)。感謝した 「夕べに、あしたに、真昼に」(詩篇55・

17) と、日に三度祈った詩人は「主はわたしがたたかう戦いからわたしを安らかに救い出されます」(詩篇55・18)と信頼を告白した。ダニエルの、祈りに続く感謝は、それと同種の信頼を表すのだろう。

12 ししの穴 狩猟のときに獲物として放つために、ライオンを飼育していたのであろう。ペルシャ時代については記録がないが、少し前のアッシリヤ時代には獣の檻に犯罪者を入れる公開処刑があったという記録がある。

14・15 王は…大いに憂え 王は総監たちの策謀を知って憤り、彼らに操られてしまった自らを恥じ、意図せざることはいえ、信頼するダニエルを窮地に追いやってしまったことを嘆いた。変えることのできないものしかし、王といえども法を曲げることはできない。それは、社会秩序の根底からの崩壊につながるからである。

16 どうか、あなたの常に仕える神が、あなたを救われるように ダニエルを救いたい一心で、王が願ったのは、ダニエルが仕える神に対してであった。皮肉なことに、これは、王以外への願い事を禁ずる法律に、王自らが違反していることになる。このように、私的、内面的なことを禁ずる点で、そもそも無理のある法律であった。

17 これを封印した これは、受刑者に他者の助けを届かせないための措置だが、結果的に、救いが神によるものであることを明白にする役目も果たすことになる。

18 その夜は食をとらず… 王は、自分の愚かさを悔い、わらにもする思いで祈ったのだろう。

19 朝まだき起きて… 拷問に朝まで耐えた囚人を赦免する慣習がバビロンの時代にはあったようで、それがペルシャ時代のダリウスの世にも続いていた可能性は高い。彼が夜明けを待ちわびたのはそのためであろう。

20 生ける神のしもべ…神はあなたを救って…免れさせることができたか 「生ける神」という表現に、すでにこの問いに対する答えがある。すなわち、生ける神ならば彼を救うことができるし、救えないならば生ける神ではないのである。

22 わたしの神はその使をおくって… 三人の友人たちの場合(3・25)と同様に、神は試練のただ中に助け手を送って、ダニエルを守られた。

参考図書 注解書 J. E. Goldingay (Word), W. S. Towner (Interpretation), 山口昇(新聖書注解 旧約4) その他 The IVP Bible Background Commentary: OT

聖書

ダニエル6・1〜24

タイトル

心から神を礼拝しよう。

暗唱聖句

わたしの神はその使をおくつて、ししの口を閉ざされた。
ダニエル6・22

目標

圧迫や迫害の中でも神への礼拝を貫く者となる。

導入

(飯田勝彦)

学校のクラスには仲良しグループがありますか？ みんなどこかのグループに入っていますか。グループに入ってみんなと同じことをしていると安心するかも知れません。でも、自分の本当にしたいことを我慢しているならどうでしょうか？ 人と同じことをやっていることが良いことばかりではありません。本当に自分がやりたいこと、本当に自分が大切にしていることを大切にする行動できるように祈りましょう。ダニエルさんから多くのことを教えられます。

すぐれた霊が宿るダニエル

今日のお話は本当にあった出来事ことです。今から約二五〇〇年も前にダニエルという人がいました。彼は

ユダヤ人でイスラエルに住んでいました。しかし、バビロンが攻めて来て、ダニエルを含む多くの人々がバビロンに無理やり連れて来られていました。

しかし、ダニエルは神から恵みとして知識と才能が与えられました。また、異国の地にありながらも国の大臣に任命されていました。ダニエルは他の者よりまさっていたので王から信頼されました。それは、彼のうちにあるすぐれた霊によるものでした(3)。これだけを見るとダニエルが特別な人のように思えるでしょう。でも、イエス様を信じる私たちにもすぐれた霊が働いておられることを知っていますか？ それが聖霊です。イエス様を信じる人の内には聖霊が確かにおられます。そして、いつも私たちを励まし慰め、内側から力を与えてくださいます。「自分なんて何もできないし、いつも失敗だらけ」と思わなくても良いのです。「聖霊様、助けてくださいい！」とより頼みながら、学校の当番のことや勉強、友だちと関係に取り組んでみてください。

神を中心に生きたダニエル

コマ回しをしたことがありますか？ 最初は勢いよく回りますが、勢いがなくなると中心がブレ始め、だんだ

んとコマが傾いて倒れます。何でも中心がしっかりしていることが大切ですね。ダニエルの人生は中心がブレていませんでした。それは確かな中心となる神様を信じていた人生です。

ダニエルを気に入った王は、彼を、全国を治める者にしようとしています。でも、それをねたむ者たちがダニエルを訴えようとしたが理由が見つかりません。そこで総監や総督らは王に「三十日間は王以外のものに願いごとをしてはならない。それを破れば獅子の穴に入れる」という禁令を出して欲しいと願いました。総監や総督は、ダニエルが神に祈ることを知っていたのでしょうか。彼らはダニエルの命を狙ったのです。王は総監らの言う通りにしました。皆さんがダニエルならどうしますか？

ダニエルはその禁令が出されたことを知っていました。が、なんとエルサレムに向かって神に祈りと感謝をささげたのです。それはダニエルにとっていつものことでした。しかも、彼は部屋の窓を開けたまま祈ったのです。もし誰かに祈っているところを見られたらどうしよう、という不安な姿は見られません。彼はいつものように日に3回の祈りをしました。ダニエルの心はいつも神が中

心でした。ですから、彼は人を恐れず、愛する神を畏れる生活を変えることはありませんでした。

みんなの中心は何ですか？

神を信頼したダニエル

ダニエルが神に祈っていることが分かり、彼は禁令の通り獅子の穴に投げ込まれました。その穴は石でふさがれ、またダニエルへの対応は変わらないことを示すために王と大臣の印をもって封印しました。

ダニエルは絶体絶命、獅子にかみ殺される状況です。ダニエルを心配した王は寝ることができませんでした。

翌朝、王がダニエルの様子を見に行きます。すると何とダニエルは天使に守られて生きていました。それは彼が神を信頼していたからです。

まとめ

みんなもダニエルのように聖霊によって、神様を中心とし神様を信頼しているでしょう。それが日々の礼拝、毎週の礼拝に現れています。周りの人や状況がどうであれ神様を信頼して、心からの礼拝をささげましょう。

♪主がわたしの手を♪（ホ89、新聖歌474、PW97）

聖書 ヨハネ1・29～37 テーマ 神の小羊キリスト

序論

(高橋頼男)

バプテスマのヨハネは、神に示されて自分が見聞きしたことを証しし、イエスがキリストであることを人々に紹介しました。彼の証しと、さらにその核心の言葉(見よ、世の罪を取り除く神の小羊)について学びます。

一、バプテスマのヨハネの証し(29～34)

バプテスマのヨハネはこの時すでにイエスにバプテスマを授けていました。そして、このイエスについて示されていたこと、見聞きしていたことを証しました。

①この方は「わたしよりもすぐれたかたである。わたしよりも先におられたからである」とは、イエスの先在性、永遠から永遠におられる神であることを証しています。

②「わたしは、御霊がはどのように天から下って、彼の上にとどまるのを見た。…わたしをおつかわしになったそのかたが、わたしに言われた…」聖霊がはどのような姿をとってイエスの上に下り、そして天から声がした、『あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者であ

る」(ルカ3・22)。御父とイエス様が一体であられることを明らかにし、父と御子の関連を証しました。

③ヨハネは神から語られていたイエスについての証しを見て、この方こそ(御霊によってバプテスマを授けるかたである)と証しました。

④そして、何よりも、このお方は「世の罪を取り除く神の小羊」であると証しています。

二、世の罪を取り除く神の小羊(29)

罪ある人間が聖なる神に近づくには、どうしてもいけにえが必要です(レビ1～7章)。とりわけ罪のためのいけにえが、ささげられなければなりません。神が備えられた世の罪を取り除くいけにえは、「神の小羊」でした。昔、神殿において、罪の贖いのために小羊が連れてこられ、人々はその小羊に手を置いて罪の告白をしました。そうすると、人の犯した罪が小羊の上に転嫁され、祭司は小羊を殺しその血を祭壇に注ぎました。このようにして、罪のない小羊による身代わりの死を通して、人間の罪の赦しの祭儀が行われたのです(レビ4・32～35)。しかし、そのような儀式によってでは人間の心はきよめられることができず、良心も休まることはなかったのです。この旧約時代の祭儀

は、やがて来られるイエス・キリストによる贖いのひな型でした（ヘブル9・11～14）。

「神の小羊」のモチーフはすでに旧約の中に出てきます。出エジプトにおいて、過ぎ越しの祭りがおこなわれ、小羊が殺されてその血が家のかまいに塗られました。その夜、さばきのみ使いは、その血を見て過ぎ越したのです（出エジプト12章）。イザヤ五三章には、苦難のしもべが「ほふり場にひかれて行く小羊」（7）として描かれています。これらはキリストのことです。ヨハネは、この十字架のイエスこそ、神の小羊キリストであることを言っているのです。イエス・キリストこそ人間の罪を贖いきよめるお方でした。このお方は、人間の罪を贖うために人となられ、罪を犯さない生涯を全うされ、十字架という祭壇の上に神の小羊としてご自身をささげられました。このキリストの血による贖いによって、初めて人間は罪の完全な贖いを受けることができました。バプテスマのヨハネはまさに、この方こそ永遠の神の小羊、人間の罪を贖うお方であることを指し示しました。

三、見よ（29）

かつて、モーセは荒野において神に命じられ、青銅の蛇

を造りました。その蛇は宿宮の中で旗竿の上につけられて高く掲げられました。そして、罪を犯し毒蛇にかまれた者が、どこにいても直ちに竿に掲げられた蛇を仰いで見るなら、瞬時に毒が除かれ生きることができました（民数記21・4～9）。罪を犯した者はいつでもどこからでも「青銅のへびを仰いで見て生きた」（9）のです。

バプテスマのヨハネは「見よ！」と叫びました。私たちのために、すでに成し遂げられた神の贖いの御業を信じ受け取るという『信仰』を促しています。信仰によって罪の赦しは私たちのものとなるのです。どんな時にも、どんな状況の中にあっても、ただひたすら、繰り返し繰り返し十字架の主を仰ぐ者でありたいと思います。

イエス様は、私たちの罪のために十字架にかかり、身代わりの贖いを成し遂げてくださいました。その十字架が、私の罪のためであると信じて十字架の主イエスを仰ぐ時、私たちの罪は直ちに赦され、きよめられ、生きるものとされるのです。

結論

今、神の小羊であるイエス・キリストを仰いで、信じて、罪の赦しを得ましょう。

研究資料

(中島啓一)

テキスト

29 その翌日 ユダヤ人たちが洗礼者ヨハネのもとに使用を遣わした日(19、28)の翌日。そのやりとりの中でヨハネは、自分はキリストではないこと、そしてキリストは自分のあとに来られることを言明している。イエスが自分の方にこられるのを見て ヨハネ福音書はイエスがバプテスマを受ける実際の場面を描いておらず、ここにイエスは、すでにヨハネからバプテスマを受けた者として登場する。ヨハネは、群衆に対してイエスを、その使命を端的に表す表現によって紹介するのである。世の罪を取り除く神の小羊 黙示録5・6以下には「ほふられ、その血によって、神のために、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から人々をあがな」った「小羊」が登場する。このようにキリストを指し示す表現として小羊を用いるのは、新約ではヨハネ福音書と黙示録の、二つのヨハネ文書だけである。旧約に目を移すと、洗礼者ヨハネがたぶん念頭に置いていたであろう個所がいくつかある。一つは「神みずから燔祭の小羊を備えてくださる」

(創世記22・8)というアブラハムがイサクをささげる場面。二つ目は出エジプトにおける過ぎ越しの小羊(出エジプト12章)である。これら二つにおける小羊は、厳密に言うところの罪のための犠牲ではないのだが、前者ではイサクに代わる犠牲として(ただし実際は雄羊)、後者では罪の力からの解放を象徴するものとして捉えることができる。三つ目の個所はイザヤ53章である。ここでは、キリストを指し示す苦難のしもべが、「ほふり場にひかれて行く小羊」(7)として「自分を、とがの供え物となす」(10)とあり、罪のための犠牲というポイントがはっきりと示されている。このように「神の小羊」のモチーフは、苦難のしもべのイメージを中心としつつ、複合的な背景を持つものと考えて良いだろう。そのイザヤ53章では、「毛を切る者の前に黙っている羊」(7)とあるように、苦難のしもべの従順さが強調されている。イエスは、まさに従順なしもべとして、ヨハネからバプテスマをお受けになった(マタイ3・15)。罪なきお方であるから、もちろん自分の罪のためではない。贖罪の死という使命を、強いられてではなく自発的に受け入れたことのおかげとして、イエスはバプテスマをお受けになったた

である。

30 わたしよりも先におられたからである 27節でもヨハネはイエスの圧倒的優位を告白しているが、ここで一つの理由を示している。「あとにおいてになる方」(27)であるのに、「先におられた」と言うことは、「初めに言があった」(1)というイエスの先在性を暗示するものであり、それが「神の子」(34)告白につながっていくのである。

31 わたしはこのかたを知らなかった 神からの約束のしるし(33)を見るまでは、ヨハネも誰がキリストであるか知らなかった。このかたがイスラエルに現れてくださるそのことのために… 彼が神から与えられた使命は、まさにイエスの公生涯のためのカーテンを開くことであった。

32 御霊がはどのように天から下って、彼の上にとどまるのを見た イザヤ書の預言「その上に主の霊がとどまる」(11・2)、「わたしはわが霊を彼に与えた」(42・1)の成就であると共に、ヨハネが与えられていたしるし(33)の実現であった。彼はそれを見て初めて、イエスこそキリストであると確信したのである(34)。

33 御霊によってバプテスマを授けるかた エゼキエルは、神が民を「清い水」(36・25)できよめるだけでなく、民に「新しい霊」(同26)をお授けになると語る。前者がヨハネの水のバプテスマであるなら、イエスこそが「新しい霊」によって救いを完成されるお方なのである。

34 神の子 バプテスマを受けたイエスに「わたしの愛する子」(マルコ1・11)との天の声があったと、他の三福音書は記す。ヨハネ福音書ではその場面の代わりに、洗礼者ヨハネが、30節での先在性の証言と合わせて、イエスと御父との永遠の関係を証言していると言えよう。

35 ふたりの弟子たち 次週分(37)を参照のこと。

36 見よ、神の小羊 前日の証言(29)の要約だが、驚くべきことは、この言葉の中に「私ではなく」イエスに従え」との意図が、おそらく含まれていたであろうことである。弟子を他の教師に譲ることは当時の社会では考えられないことであり、ここにイエスの前でのヨハネの徹底した謙遜が表されている(3・30参照)。

参考図書 注解書 G. R. Beasley-Murray (Word), F. F. Bruce (Eerdmans), B. Lindars (New Century Bible), 他 The IVP Bible Background Commentary: NT.

聖書

ヨハネ1・29〜37

タイトル

神の小羊

暗唱聖句

見よ、世の罪を取り除く神の小羊。

目標

神の小羊キリストを信じ、罪の赦しを頂く。
ヨハネ1・29

導入

(後藤 真)

「メリーさんの羊／メエメエひつじ／メリーさんの羊／まっ白ね」という歌を知っている人もいるでしょう。小羊と聞くと、白くてふわふわでかわいい姿を思い出します。体が白で顔が黒い羊や、茶色い羊、牛のような模様の羊もいるそうです。

では、今日の聖書に出てくる「神の小羊」とは、どんな小羊なのでしょう。

バプテスマのヨハネ

みなさんはバプテスマのヨハネという人を知っていますか。実はこのバプテスマのヨハネが、イエス様のことを「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と言ったのです。バプテスマというのは洗礼のこと。ヨハネはヨルダン川

で洗礼を授けていたので、洗礼者ヨハネ、バプテスマのヨハネと呼ばれていました。イエス様の十二弟子の中にもヨハネがいますが、弟子のヨハネとは違う人です。

バプテスマのヨハネが洗礼を授けていると、祭司やレビ人といった人たちがやってきました。この人たちは神殿で礼拝を取り仕切っていました。それで、洗礼という大切なことをしているのはどういふ人なのか気になって「あなたはだれですか」と、バプテスマのヨハネに聞き来たのです。

バプテスマのヨハネは話しました。

「わたしは、キリスト、つまり救い主ではありません。また、預言者でもありません。わたしは、救い主が来られる準備をするために来たのです。わたしは水で洗礼を授けます。わたしは、わたしの後から来られる方のくつのひもを解くぬうちもあります」

くつと言っても、スニーカーではありません。そのころの人たちは足にひもで結びつけるサンダルをはいていました。サンダルのみもをほくく仕事はしもべの仕事でした。バプテスマのヨハネのような立派な人が、しもべとして仕えるのも申し訳ないと思うほどの人。それこそ

が救い主イエス様だったのです。

世の罪を取り除く神の小羊

次の日のことでした。バプテスマのヨハネはイエス様がやってくるのを見て言いました。

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」

バプテスマのヨハネのこのことばを聞いた人たちは、小さなかわいい羊ではない、別のことを思い浮かべました。それはいけにえの羊でした。旧約聖書のイザヤ書の中に、イエス様のことを教えたところがあります。そこでは、イエス様を、いけにえになるために連れて行かれる小羊として示し「自分を罪のためのいけにえにする」と書かれていますからです。

「世の罪を取り除く神の小羊」とは、十字架にかかって罪からわたしたちを救うイエス様のことです。バプテスマのヨハネが洗礼を授けていたのも、救い主であるイエス様が来られたことを知らせるためでした。イエス様が洗礼を受けたとき、御霊（聖霊）がはとのように天から下って、イエス様の上にとどまりました。バプテスマのヨハネはそれを見て、この方は神の子であると証したのです。

罪を取り除くイエス様

イエス様は、罪を取り除いてくださる方です。「あんな悪いことをしてしまった」「いじわるをしてしまった」「嘘をついてしまった」そういう一つひとつの罪を赦してくださるだけではありません。わたしたちが神様よりも自分をいちばんにし、他の人よりも自分が得をしようとする罪の根っこを取り除いてくださるのです。そして「イエス様に喜ばれることはなんだろう」と、考えられるようにしてくださるのです。

やってしまったことを神様におわびすることは大切なことです。でも、罪が赦されてスッキリしただけでは自分の満足だけです。神様の聖霊に導いていただいて、イエス様に喜ばれる、まわりの人を大切にすることができたらどんなに素晴らしいことでしょう。イエス様はわたしたちをそのように素晴らしく変えてくださるために、いけにえの小羊として十字架にかかってくださったのです。このイエス様を信じ、従ってゆきましょう。

♪両手いっぱいいの愛♪

(PW13、新聖歌483、ホ146、イン41)

聖書 ヨハネ2・1～11 テーマ 変化をもたらすキリスト

序論

(高橋頼男)

水がぶどう酒になるという変化は、自然界のそれなりの過程と熟成期間を経て可能だということは理解できます。しかし、それらを全部省いて一瞬で水がぶどう酒に変わるとするのは、奇跡としか言いようがありません。主イエスは、ガリラヤのカナにおける結婚式に招かれ、その宴において最初の奇跡（しるし）を行われました。

一、ぶどう酒がなくなる(1～3)

イエスラエルの結婚の宴は一週間も続いたようです。人々にとってこれは特別な楽しみの時で、その間、大いに喜び楽しみました。そして、その喜びと楽しみの中心にぶどう酒がありました。しかし宴席の真つただ中でそのぶどう酒が尽きてしまったのです。理由は、イエスの弟子たちが大勢で押しかけたからとも推測されます(参照・研究資料)。とにかく、イエスも弟子たちも祝宴に参加し、婚礼の喜びと楽しみを共にしたのです。

主催者側としては、集まってくれた客に対して大変な

失態です。せっかくの喜びの席が台無しになりかねない事態です。しかし、その宴席にイエスがおられたということは、本当に大切なことでした。

二、マリヤの信頼、しもべらの忠実(3～8)

この結婚式で母マリヤは主催者としての何らかの責任ある立場を持っていたようです。つまり婚礼の祝いの席を守る立場にありました。そこで、彼女はこの窮状をすぐさまイエスに訴えました。イエスが必ず何かをしてくれることを信じていたからです。これまでもこのようなことが何度もあったのでしょうか。母のイエスに対するゆるぎない信頼がありました。

①イエスにありのままを訴える

ああしてください、こうしてください、なんとかしてください、というのではなく、マリヤは現在の窮状のありのままを、簡潔にイエスに告げました。全幅の信頼があったからです。しかも、イエスがなされることかどのようなことであつても必ず最善をなされるという信頼です。イエスの返事は、拒絶というのではないとしても、決して良い返事ではありませんでした。しかし、マリヤの一貫した信頼に変わりはありません。

②しもべらに備えを言いつける

さらに、マリヤの信頼は、しもべらにイエスの言われることは何でもするようにと前もって言いつけるところにも表われました。困難や危機の中で為すすべもなく無為に過ごしたり、また怠惰であつてはなりません。主に信頼し、期待し、今なすべきことをしっかりと成し遂げることが大切です。

③しもべらの忠実な働き

しもべらは、マリヤに言われたように、また、イエスが命じられたように、誠実かつ忠実に、すべての甕かめにふちまで水をいっぱい入れました。もし、こんなことに何の意味があるかと問い、不信を持つなら、このようなことは決して出来ません。行つたとしても適当なところで役割を済ませたことでしよう。彼らはしもべの立場に徹して、言われたとおり忠実に働きました。そして、彼らにもまた、自分たちの理解を超えてイエスがなされることへの期待があつたのではないでしようか。その期待は見事に答えられたのです。へ水をくんだ僕たちは知っていた。奇跡を行われたのはイエスですが、その業に参加したマリヤの信頼としもべらの従順がありました。

三、水がぶどう酒に変わるとは(11)

しもべらが汲み、持っていった水は、変化して良いぶどう酒となりました。ぶどう酒をなめた料理頭は、その素晴らしい味わいに驚いて花婿を呼んで褒めました。このようにイエスはマリヤの訴えに応えて水をぶどう酒に変え、婚礼の危機を助けられました。確かにそれが奇跡の直接の目的でした。しかし、この奇跡にはそれ以上の意味がありました。〈そして弟子たちはイエスを信じた〉。この奇跡の本当の意味と目的は、この奇跡を通して神の栄光が現され、弟子たちがイエスを神の子、救い主と信じるためです。イエス・キリストは人間の罪を赦ゆるし、死から命へと救うことのできる神であり、救い主であるということに分からせるためでした。人間の魂の救いほど大きな変化をもたらす奇跡はありません。彼らはイエスをキリストと信じ告白する者と変えられていくのです。

結論

危機の中で、キリストは私たちの状況を変え、私たちを変革してください。それは、素晴らしい経験です。わたしたちは、主イエスに全く信頼し、キリストの変革をいただきましょう。

研究資料

(中島啓二)

テキスト

1 三日目に ナタナエルの召命から二日後(一日目も数に入れる)。この「三日目」が十字架と復活による栄光を予感させているという説、1・19から数えて七日間となる(1・39でも日付が変わる)ことから、天地創造に比しての「新創造」が提示されているという説もあるが、実際そういう意図があるかどうかは不明。ただしヨハネが受難に多くのページを割いていること、また新創造が主要テーマの一つであること(3・3、20・22等)は確かである。ガリラヤのカナ ナザレの北北東6kmのケフル・ケンナ(記念する教会が二つある)、あるいはナザレの北14kmのキルベト・カーナ(現在は廢墟)。いずれも、婚礼の主人とイエスの家族との親しい関係を説明できる距離。婚礼 ユダヤの結婚式は多くの客を招いて七日間も行われた。

2 イエスも弟子たちも、その婚礼に招かれた 母マリヤが接待役を務めていたことと合わせ、家族ぐるみの交わりがあったと推測される。大勢の弟子たちが一緒に出

席したことも、ぶどう酒の欠乏の一因かもしれない。

3 ぶどう酒がなくなった 来客は相応の祝儀を持参することが通例であったので、ぶどう酒が無くなることは、主人の社会的評判を落とすことにつながった。母はイエスに言った 困ったときは、このようにイエスを頼りにしてきたのであろう。この時も窮状をありのまま伝えた。

4 婦人よ 通常は母親に対して用いない、丁寧だが距離を置く呼びかけ。決して無礼な表現ではない。イエスの助けを必要とする者は、たとえ母であっても、母と子の関係に基づいてそれを求めるべきでないことを示す。

あなたは、わたしと、なんの係わりがありますが 聖霊を受け、御父から遣わされた使命を果たすための力をお受けになったイエスにとっては、父の御心に従うことが、何にも優先されるのである。わたしの時は、まだきていません ヨハネ福音書において「時」(ギリシア語)は、十字架と復活による栄光の時を指し示す。その時はやがて来る(17・1)のだが、今はまだ来ていないのである(7・30、8・20)。

5 母は僕たちに言った… マリヤは、イエスの一見不親切に思える答えの中にも、その真意のかけらを汲み

取った。ここに、イエスに託すならば問題は解決するに違いないと信じるマリヤの強い信仰を見ることが出来る。

6 ユダヤ人のきよめのならわしに従って この「水」は手を洗う、器をきよめるといった宗教的儀式のために用意されたものであり、旧約の律法を象徴している。イエスはそれを、よりよいものに置き換えてくださる。四、五斗 2、3メトレテス(1メトレテスは約39リットル)。石の水がめ 陶器などと違い、石のかめは宗教的な汚れを受けることがないので、一般によく用いられた。六つ完全数に一つ足りない数字で、律法主義の不完全さを象徴していると解釈する注解者もいる。

7 彼らは口のところまでいっぱいに入れた 彼らはマリヤに言われたとおりに、イエスの指示に完全に従った。

8 料理がしら 料理や酒についての責任者。

9 ぶどう酒になった水 水をぶどう酒に変えたイエスは、律法を「廃するためではなく、成就するために」(マタイ5・17) 来られた。この方にあつて古い律法に代わり「霊とまこと」(4・24) による新しい礼拝が始まる。

10 初めにいぶどう酒を出して… 人々の感覚が鈍くなつていくにつれて、そうすることは世の常である。し

かし神の恵みはそうではない。末広がりの恵みである。

11 しるし 単なる奇跡ではなく、その背後にある霊的な意味を悟らせるもの。この福音書に記されている7つのしるしのうちの最初のものである(他に4・46、54、5・1、9、6・1、14、16、21、9・1、12、11・1、44)。その栄光を現された 「わたしたちはその栄光を見た」(1・14)。受肉された言であるお方が、その創造の力をあらわされた。「神の国」はしばしば祝宴にたとえられ(マタイ8・11他)、ぶどう酒はそれを特徴づけるものである(イザヤ25・6)。カナの婚宴においてあらわされたイエスの栄光は、御子こそが神の国の恵みを世にもたらすお方であることを示している。モーセの最初のしるしは水を血に変えることであつた(出エジプト7・20)。それに対し、イエスが水をぶどう酒に変えられたことは、イエスが、古い律法の受領者をはるかにしのぐ、新しい命の授与者であることを力強く示している。

弟子たちはイエスを信じた 十字架と復活の栄光へとつながっていくこれらのしるしを通して、弟子たちの信仰は強められていく。

参考図書 9月8日分と同じ。

聖書

ヨハネ2・11

タイトル

水がぶどう酒に

暗唱聖句

イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行い、その栄光を現された。

ヨハネ2・11

目標

キリストによる変革を経験する者となる。

導入

(後藤 真)

みなさんは結婚式に出たことがありますか。教会で結婚式があつたよ、という人もいるかもしれません。結婚式は結婚する二人が神様とみんなの前で誓いをする式ですが、その後にはパーティーが開かれることがあります。結婚式のパーティーではごちそうが出ることもあります。

イエス様のころ、イスラエルでは結婚式のパーティーはとても大切な、また大きなイベントでした。今日お話しするのは、その結婚式のパーティーで起こった大ピンチと、それを解決したイエス様の物語です。

ぶどう酒がなくなつた!

イエス様と弟子たちは、結婚式に招かれました。ガリラヤのカナという町での結婚式です。ところがその結婚式のパーティーでトラブルが起こりました。ぶどう酒がなくなつたのです。お客さんが思っていたより多かったのでしょうか。それともだれかがたくさん飲みすぎたのでしょうか。どちらにしても、結婚式にぶどう酒はつきものでした。これがないと、結婚した二人が恥をかくことになってしまいます。

結婚式のお世話をしていたのはイエス様のお母さん、マリヤでした。イエス様はガリラヤ育ち。神様の教えを伝えていたのガリラヤが中心でした。結婚式はガリラヤのカナで開かれましたから、もしかすると結婚した人とイエス様は親しかったのかもしれませんが。そんなこともあつてマリヤはイエス様に言います。

「ぶどう酒がなくなつてしまつたわ」

ところがイエス様は、

「女の人、あなたとわたしと何の関係がありますか。わたしの時はまだ来ていません」

と、不思議な答えをします。この大ピンチ、どうなつて

9月

15日 礼拝メッセージ例

しまうのでしょうか。

水がぶどう酒に

ところが、マリヤはイエス様のこの答えにがっかりしませんでした。しもべたちに

「この人が言いつけることは何でもしてください」とお願いしました。するとイエス様はしもべたちに

「かめに水をいっぱい入れなさい」

と、言いました。このかめは、子どもが中に入れるくらい大きなもので、小さな風呂にいっぱいになるくらいの水を入れることができました。しもべたちは、

「大変だなあ。こんなところに水を入れてどうなるんだろう」

と、思ったかもしれませんが、でも、そんな文句は言わず、言われたとおりにかめを水でいっぱいにしました。しかもかめは六つ！そして、イエス様に言われたとおり、料理長のところにかめを持っていきました。味見をした料理長はびっくり。花婿さんと呼んで言いました。

「上等のぶどう酒じゃないか。だれでもはじめは良いぶどう酒を出して、みんなが酔っ払ってきたら悪いぶどう酒にするのに。こないいのを今までとっておくなん

て！」

変えてくださるイエスさま

イエス様は結婚式の大ピンチを、水をぶどう酒に変えることで救ってくださいました。でも、水がぶどう酒に変わった奇跡が大切なではありません。イエス様がこのことを通して栄光を現し、イエス様こそが神様の祝福をもたらず方だということが分かったことが大切なのです。弟子たちは、このことを通してイエス様が神様から来られた救い主だと信じる気持ちを強くしたのです。

イエス様は、わたしたちを神様の祝福の中に入れてくださいます。神様の気持ちは無視し、人より自分が得たいという自分中心に生きているわたしたちを、イエスさまに喜ばれる人に変えてくださいます。

それは水をぶどう酒に変えるよりずっと難しいことですが、そのためにイエス様は十字架にかかり、よみがえってくださいましたのです。イエス様を救い主と信じて、わたしたちも変えていただきましょう。

♪主は今生きておられる♪(PW49)

聖書 ヨハネ3・1～15 テーマ 新しく生まれる

序論

(福井文彦)

ニコデモは当時宗教的にも社会的にも知識と経験に富む、高い地位を得た、ユダヤ人を代表する人物であった。その彼がイエスを〈先生〉と呼び、教師として最高級の人物と尊敬していた。しかし、彼にはイエスが人を新生し、霊的命を与えるメシヤ(救い主)であるという認識に欠けていた。

一、ニコデモのイエス理解

ニコデモは〈パリサイ人〉であった。パリサイ派の人は、ユダヤ教の正統的な信仰を持ち、旧約聖書の權威を信じ、それを実践している立派な人というイメージがあった。また、彼は〈ユダヤ人の指導者〉、つまりユダヤ人議会の議員でもあった。ユダヤ人議會は、ユダヤ人の政治的議會であり、ユダヤ教の最高の議會でもある。だから、彼は人々から尊敬され、有力で有名な人物でもあった。

彼は自分の社会的立場、人々に対する面子、体裁を考

え、人目を避けて夜こっそりイエスのところに来たとと思われる。彼はイエスに会う必要、飢え渴きを覚えて自らイエスを尋ねて来た。彼はイエスを〈先生〉と呼び、最大級の尊敬の念を込めて教師として認めている。そのお方から教えを得ようと求めて来たのである。

ニコデモはイエスを、〈神からこられた教師〉、〈神がご一緒〉である、だれ一人出来ない〈しるし〉(奇跡)を行うお方と理解していた。彼はイエスの奇跡を見たことによつてイエスを非常に高く評価していた。しかし、彼にはイエスがメシヤであるとの認識に欠けていた。

二、水と霊による新生

そこでイエスは答えて、〈よくよくあなたに言っておく。だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない〉と言われた。このところで〈新しく〉と訳されているギリシア語はアノーセンで、「上からの、天からの」という意味でもある。これは神により新しく生まれる、霊的誕生を意味する。人が生まれながらに持っている肉体的命ではなく、神から与えられる霊的命のことである。

ところが、ニコデモにはイエスが「新しく生まれる」

と言われたことが皆目分^{かいく}からず、肉体的な誕生のことしか考えつかなかった。彼は、〈人は年をとってから生れることが、どうしてできますか。もう一度、母の胎にはいつて生れることができましようか〉と、的外れな答えをしている。

そこで、イエスはもう少し詳しく説明された。〈だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない〉。ここで、〈水〉とは、①悔い改めと信仰告白、②み言葉、③御霊を指すと解し、「水すなわち御霊」など考えられる。いずれにしても、水と御霊による心の刷新（根本的変化）とその結果による霊的真理への目覚め、つまり神が与える霊的命を得ることが新生である。

三、新生の説明

イエスはニコデモが聞いた内容に当惑し、不思議に思っている（7）ことに対して、〈風〉を例として用いられた。風は吹いていても、目で見えることはできない。そんな風でも音なら聞くことができるし、そよぐ木々を見れば今風が吹いているのだと分かる。そのように、御霊による新生も、人間の目で見えることはできない。しかし、御霊が新生させてくださると、その人の人生がすっかり

変わるので、だれの目にもよく分かるのである。

しかし、ニコデモはまだイエスの言っておられることが理解できなかった（9）。そこでイエスは、イスラエルの民が昔、経験した故事を引き合いに出された（民数記21・4～9）。食物と水の不足に対して民は指導者モーセに逆らった。そこで神は罰として、彼らに毒蛇^{どくへい}を送り、それにかませられたので、つぶやいた多くの者が死んだ。民は自分たちの不従順の罪を悔い、モーセにとりなしの祈を乞うた。モーセが祈ると、神は、あの毒蛇と同じ形をした蛇を青銅で作り、それを旗ざおの上につけるように命じられた。そして、毒蛇にかまれ苦しんでいる人が、その青銅の蛇を仰ぎ見ると救われたのである。それと同じように、十字架に上げられたイエスを信じて、仰ぎ見る者はだれでも、救われ、永遠の命が与えられて、神の国に入ることができるのである。

結論

イエスは、だれでも、イエスに対する信仰によって新生し、罪とその結果の永遠の刑罰から自由にされ、永遠の命を与えられて神の国に入ることができることを教えられたのである。

研究資料

(井上義実)

ヨハネによる福音書は、共観福音書と呼ばれるマタイ、マルコ、ルカによる福音書と比べて独自な点が多い。本個所に登場するニコデモもヨハネのみが記している。

テキスト

1 パリサイ人 パリサイの語源は分離された者たちという意味であるが、何から分離されていたかについては諸説がある。パリサイ人が律法を厳守し、律法にかなわない人々から分離されていたと考えられている。パリサイ人は成文律法だけではなく、口伝律法も同等に受け入れていた。ニコデモ 人々の勝利者という意味がある。ギリシヤ名であるが、ユダヤ人には普通に見られる名前である。指導者(ギ)アルフォン) 支配者、指揮官などの意味もあるが、ここではサンヒドリンの議員を指している。地方には小法廷であるサンヒドリンがあったが、エルサレムの大サンヒドリンは71人の議員からなる。ユダヤの最高自治機関であり、最高法廷であった。

2 夜イエスのもとにきて 保守派、旧守派のパリサイ人は、宮きよめを行なったイエスを敵視した(ヨハネ2・

14以下参照)。ニコデモはイエスに教えをこう姿を仲間に見せるわけにはいかず、権威ある民の指導者としての外聞もあった。世の光であるイエスの元に、暗い夜訪問したニコデモの姿は、彼の心の闇を象徴している。先生、わたしたちはあなたが神からこられた教師であることを知っています まわりくどく聞こえる。ニコデモは、ためらいながらも、それを越えて、わざわざイエスに会いに来たのであった。漠然とであったとしても、イエスの内に真実を見出していった。

3 よくよくあなたに言うておく イエスが強調されるとき使う表現で、ヨハネが特徴的に書き残している。ヨハネ福音書中に24回用いられている。新しく生れなければ、神の国を見ることはできない ニコデモのあいさつに対して、イエスの答えは唐突に聞こえる。イエスの関心はニコデモの魂にあった。ニコデモの必要を大胆に指摘されている。霊的な新生についてである。新生は神学用語であって、聖書中には使われていない。イエスとニコデモとの対話は、新生の教理を導き出す最有力の聖書個所である。悔い改めと信仰によって、新生はなされる。「新しく生まれる」は、再び生まれる、上から生まれると

も訳される。内容的には、再び、神によって、新しく生まれるのである。

4 人は年をとってから生れることが、どうしてできませんか ニコデモはイエスの言葉を、この世の規準で測って不可能だと言っている。イエスの言葉は、神の規準で捉えなければならぬ。年令を条件に持ち出すこの言葉から、ニコデモは相応の年配であつたと推測される。

5 水と霊とから生れなければ この言葉は多くの解釈を生んできた。旧約聖書に表されている水の働きの重要点は、心の悪や罪を洗い清めることである(エレミヤ4・14、エゼキエル36・25他)。水が汚れを洗い流すように、聖霊が心に働いて、新しく生まれ変わることができる。

8 風は思いのままに吹く 風は目には見えない。しかし、風が吹く時に音が聞こえ、風の流れを感じることができる。聖霊も目には見えないが、その働きを否定することはできない。風(ギブニューマ)は聖霊と訳すことが圧倒的に多いが、この文脈では風と訳されなければ意味が通らなくなる。

9 どうして、そんなことがあり得ましようか ニコデモはなお疑問を持った。しかし、ニコデモは疑問を持つ

ても、イエスを否定しなかった。イエスの言葉を理解しようと反芻し続けたと思われる。後にニコデモは、イエスに対するパリサイ人の誤った断定を正し(ヨハネ7・45以下参照)、アリマタヤのヨセフと共にイエスの遺体を葬った(ヨハネ19・38以下参照)。

12 地上のことを語っている 新生は神による業であるが、人間の魂の内になされることとして地上のことである。天上のことを語った場合 神の独り子イエスが人類の罪をあがなうために死に渡され、永遠の命を与えるものとなる。神が備えられた大いなる救いの真理である。

13 天から下ってきた者 言うまでもなく神の子イエスを指す。救いは律法主義者のパリサイ人が主張するように、地上の人間の努力でなされるのではない。天上の神から与えられなければならない。人は救いに与れない。

14 モーセが荒野でへびを上げたように パリサイ人が崇敬するモーセの故事が引用される。青銅のへびを仰いだ者のみが救われた。イエスは十字架に上げられることによって救いを成就された。

参考図書 Leon Morris (NICNT), G. R. Beasley-Murray (WORD), 他

聖書

ヨハネ3・1-15

タイトル

イエス様を訪ねたニコデモ

暗唱聖句

だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない。
ヨハネ3・3

目標

新生の必要を知り、キリストを信じて新生の恵みを頂く。

導入

(松浦みち子)

皆さんは、ゲームが好きでしょう。ゲームオーバーしたら、リセットしてまた何度でも新しく挑戦できるからね。でも、わたしたちの日常生活はそう簡単ではありません。お友だちとの関係がうまくいかなかったり、また、取り返しがつかないような失敗をしてしまうこともあります。そんな時、「あーあ、もう一度、新しく生まれ変わることができないかなあ…」って、考えたりすることもあるでしょう。聖書には、「新しく生まれ変わるることができる！」と教えられているんですよ。

イエス様を訪ねたニコデモ

ある日の夜のことです。一人の人が暗い夜道を歩いてイエス様を訪ねて行きました。ニコデモという名前のと

ても偉いユダヤ議会の議員でした。町の人々からは「ニコデモ先生」と言われ、聖書をよく読み、何でも知っている学者でもありました。しかし、どうしてそのような立派な先生が、イエス様を訪ねてきたのでしょうか。しかも、夜に。ニコデモさんは、以前からイエス様の教えや病気を治される奇跡の業を見聞きして、ぜひ、イエス様に尋ねたいことがあったのです。そこで、人目を避けてイエス様を訪ねました。「先生！ あなたのなさるすばらしい業をみれば、先生が本当に神から遣わされたお方だとわかります」と。ニコデモさんはどうすれば神の国に入れるのかを知りたかったのです。

新しく生まれる

イエス様は澄んだ瞳でニコデモさんを見つめられ、「よく聞くのですよ。人はもう一度新しく生まれなければ神の国にはいることはできません。」「えっ、もう一度生まれるって？」「ビックリしてニコデモさんは目をぱちくり。「イエス様！ こんな年寄りの私が、お母さんのお腹に戻って赤ちゃんになるんですか？ そんなこと、できっこないですよ。無理です。」ニコデモさんはイエス様のおっしゃることがさっぱりわかりません。「新しく生ま

れるということは、体のことではありませんよ。誰でも水と霊とから生まれなければ、神の国に入ることはいくできないのです。」って、いったいどういうことでしょう。ニコデモさんはちんぷんかんぷんです。イエス様は、わたしたちがお母さんのお腹からオギヤアって生れただけでなく、わたしたちの魂が新しく生まれる必要があることと洗礼を受けることを教えられたのです。人間からは人間のいのちが生れるだけです。けれども聖霊様は、天からの全く新しいいのちをくださるのです。

見上げて信じる

では、新しく生まれるために必要なことは、何でしょう。一生懸命がんばってよいことをすればよいのでしょうか。いいえ、自分の力によるのではなく、イエス様を神の子と信じるだけでよいのです。それは神様の霊の働きによるのです。イエス様を信じ新しく生まれると、心から喜びが湧いてきます。皆さんは、風を見たことがありませんね。手で捕まえることもできません。でも、木の葉やカーテンが揺れているのを見たり、音を聞くと風が吹いているのが分かります。同じように、霊の働きによって人が新しく生まれることは目には見えませんが、

その人の生き方そのものが変えられるので、知ることが出来るのです。

イエス様は、ニコデモさんに旧約聖書のお話をされました。モーセがイスラエルの人々をエジプトから救出し荒野を旅していたとき、つらいことがいっぱいあり、人々は神様に不平を言い逆らったために、裁きを受けて、多くの人が毒蛇にかまれました。その時、神様はモーセに「青銅で蛇を作り、それを旗ざおの上につけ人々の前に高く掲げなさい。その青銅の蛇を見上げた人は命が助かるのです。」と約束されました。不思議な方法ですね。

「何だって！ そんなバカなことあるか」といつて仰がなかった人は毒が回って死にました。しかし、神様のことばを信じて見上げた人は助かったのです。

イエス様は「わたしはまもなく青銅の蛇のように木の上に上げられます。それは、それを見上げる人がだれでも救われ、永遠のいのちを持つためです。」とお話になりました。神様から遣わされたイエス様の十字架を見上げて信じるなら、だれでも神の子として新しく生まれ、天国に入れていただけるのです。うれしいですね。

♪じゅうじか わが力♪ (ホ115)

聖書 ヨハネ4・4～26 テーマ 生ける水への招き

序論

(鎌野善三)

前章のニコデモとは対照的に、今週扱う一人の女性は地位も低く、旧約聖書の知識もない、一般庶民である。しかも、ユダヤ人が蔑視していたサマリヤ民族だったが、主イエスはご自分からこの女に近づかれた。それは、罪の中を歩んでいた彼女に、〈永遠の命に至る水〉を与えるためであった。尽きない喜びを与えてくれるこの水は、以下のようなものである。

一、だれにでも与えられる

ヨハネのみが記す初期ユダヤ伝道を終えて、主は再びガリラヤに戻ろうとされた。地理的には、エルサレムからそのまま北に進めばガリラヤに行けるのだが、その場合は〈サマリヤを通過〉しなければならぬ。多くのユダヤ人はそれが嫌で、ヨルダン川沿いの遠回りの道を選んでいった。しかし、主があえてその道を通られたのは、この女性に会うためであったことは明白である。ユダヤ人の知識階級に属していたニコデモに必要であった〈永

遠の命〉は、サマリヤ人の庶民階級の女にも必要であった。

永遠の命は、民族、階級、性別の違いに関係なく、すべての人に必要である。神はそれを与えたいと願っておられるのだ。しかし、昔も今も、多くの人々はそれを知らず、求めようとしぬい。

二、求める者に与えられる

〈時は昼の十二時ごろであった〉。乾燥地帯の真つ昼間は最も暑い時である。そんな時間に水をくみに来るのは、人と出会うのをはばかる場合であることは、容易に推測できる。だが主はあえてこの女性に〈水を飲ませて下さい〉と言われた。ユダヤ人の男性から声をかけられることなど一度もなかったこの女性が驚いたのも無理はない。

なぜ主はこのようになことをされたのか。それは、この女性に自分の必要を自覚させるためであった。18節でわかるように、彼女は過去に五人の夫があつたが彼らと離別し、しかも現在の夫は、正式な夫ではなかつた。この時代にそのようなことをする女性は、社会からつまはじきされていたことは確かであろう。その女性に〈永遠の

命」を求める崇高な思いはなかったが、毎日水をくみに来る重労働から解放してくれるというなら、話は別である。だから彼女は最後に、「主よ、わたしがかわくことなく、また、ここにくみにこなくてもよいように、その水をわたしに下さい」と言った。

ニコデモの場合と同様、主はこの女性とも対話された。そして、自分に何が欠けているかを自覚させ、それを求めさせられたのである。「求めよ、そうすれば、与えられる」とは、昔も今も共通する基本原則であることを忘れてはならない。

三、主イエスによって与えられる

しかしそこに至るまでには、かなりの時間がかかった。彼女は、「くむ物がないのにどうやって?」「あなたは祖先のヤコブよりも偉いの?」と質問している。この間に、主は「この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」と答えられた。主は、目に見える水ではなく、永遠の命という水について語られたのだ。それは、主イ

エスしか与えることのできない水である。しかも、その水を飲む者は自分が泉のようになって、他の人々にも水を与えることができるという。何とすばらしいことか。永遠の命とは、単に死んでから後の命というのではない。それは、地上で生きている時にも、その人からわきあがる喜びの泉である。25節以降には、不道徳な生活をしていたこの女性の生活態度が、主イエスと出会うことによって一変したことが記されている。人の目を避けるのではなく、自ら進んで人々に、主イエスが「キリストと呼ばれるメシヤ」であることを伝えたのだ。彼女の中に喜びの泉がわきあがったことは否定できない。

結論

キリストに出会うとき、私たちは喜びあふれる生涯へと変えられる。新しい命、永遠の命が与えられるからである。それは人種性別を問わず、おとなでも子どもでも、だれにでも与えられる。ただし、求めようとしなければ与えられない。私たちは、「その水を私にください」という求めをおこさせるように語り、行動していこう。宣教はそこから始まっていくのだから。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

4 しかし、イエスはサマリヤを通過しなければならなかった この言葉はヨハネにおいては神により与えられた道を言い表している。神の必然ともいうべき言葉。

5 スカル ヤコブの井戸の北東約一キロメートルのところにありといわれている。

6 旅の疲れを覚えて 主は私たちと同じ肉の体を持ち、罪以外は人間としての状態をことごとくとっておられた(ピリピ2・6～11)。時は昼の十二時ごろであった口語訳は、ユダヤ的な時刻の呼び方(夕方の六時から朝の六時、朝の六時から夕方の六時)に従って、「第六時」を「昼の十二時」と訳している。

9 ユダヤ人はサマリヤ人と交際していなかったからである サマリヤがアッシリヤに滅ぼされ、サマリヤ以外の地域からサマリヤに移住させた外国人と結婚(雑婚)し、ユダヤ人としての純粋性を失ったことから、両者の反目が起こった。

10 神の賜物 文脈から考えると、その次に登場する「永

遠の命に至る水」(14)を指すにとることができる。生ける水 永遠の命に至る水をさす。また神に対する人間の霊的な渴きを根源的にいやす「いのちの水」のことでもある。

11 前節の主の言葉に対して、この女性は「生ける水」のことを「わき出る水」としか理解していなかった。

13 この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう 主は、彼女の心を、自らが与えようとする「永遠の命の水」へと導こうとされる。その手始めとして、ヤコブの井戸からの水は、たとえ喉を潤したとしても、また喉が渴くものであることを指摘される。

14 わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう 主が与える水は ①内面的なものであり、②その人のうちで源泉となるものであり、③永遠の命に至らせる水である。このことは、イエスの使命について、またイエスが何者であるかについて、明確に宣言している個所である。

16～18 この個所から新しい展開にはいる。イエスは自らの真相を明らかにするが、女はまだイエスが与えようとする水の真の意味はわからずにいる。しかし、この水

を真に与えたいと願うならば、自らの真相を知ることと罪の悔い改めは、避けて通ることができない。

19 **主よ、わたしはあなたを預言者と見ます** 「あなたがた」はわたしをだれと言うか」(マタイ16・15)とあるように、まずイエスの本性をわからせることが重要である。

20 **この山** ゲリジム山といわれている。サマリヤ人はアブラハムにならない、ゲリジム山に神殿を築いて礼拝をささげていた(創世記12・6〜7、申命記11・29等)。一方ユダヤ人はシオンの山の上に立てられたエルサレム神殿で礼拝をささげ、そこに神がおられると信じていた。

21 **あなたがたが、この山でも、またエルサレムでもない所で、父を礼拝する** 主イエスは、福音のもとではもはやエルサレムかゲリジムかといった場所は問題ではなく、どこにおいても父なる神に出会う道を見いだすようになるというのである。

23 イエスはここで、来るべき新約の時代における真の礼拝のあり方を示される。それは、エルサレムかゲリジムかといった場所を越え、あるいはユダヤ人かサマリヤ人かといった人種を越えて、あらゆる場所において、あ

らゆる人種によってささげられる礼拝である。それは、霊とまことによる礼拝である。霊 様々な解釈が見られるが、神の霊、聖霊を指すという解釈が一般的である。

まこと(ギ)アレーセア ヨハネにおいては、アレーセア(真理)はキリストにおいて表されている。キリストこそ真理そのもののお方である(ヨハネ14・6)。そ
うだ、今きている 福音の時代が到来し、すでに始まったことをイエス自ら宣言している(マルコ1・15)。

24 **神は霊である** 神の中心的な属性(ご性質)のひとつ。神が霊であるから、私たちはどこにおいても神を礼拝することができるのである。

25 前節のイエスの言葉にもかかわらず、彼女はまだメシヤ到来を将来的な事柄として捉えている。

26 **わたしが、それである**(ギ)エゴー・エイミ 神がモーセにご自身を顕された言葉(出エジプト3・14)と同じ言葉を用いて、イエスご自身を語られる。このイエスとの出会いによって、彼女の行動は一変する(27以下に明確に記される)。

参考図書 ビ・エフ・バックストン『ヨハネ傳講義』(バックストン記念霊交会) 他

聖書

ヨハネ4・4〜26

タイトル

喜びいっぱい的心

暗唱聖句

わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがない。ヨハネ4・14

目標

罪を悔い改め、キリストを信じて、喜びに満ちた生涯を送る。

導入

(飯田勝彦)

皆さんは、どんな時でも喜んでいたいと思うでしょう。どうしたら、嫌なことや悲しいことがあっても喜んでいえることができるでしょうか。その秘訣を知りたいよね。

心が渴いていたサマリヤの女

ユダヤの北に、サマリヤという地域がありました。ある時、イエス様がそこに来られ目の前にあった井戸の側に座って休まりました。それは、ちょうど昼の十二時ごろでした。するとそこに一人の女性が井戸の水を汲みに来ました。普通、水汲みは女性が朝にする仕事でした。朝になると井戸は、多くの人で賑わい、いろいろな話をして楽しんでいました。でも、イエス様の前に現れた女性とは違いました。彼女は人が集まらない時間をねらって

水を汲みに来ていたのです。皆さんは「今日は、誰にも会いたくないし、話してもしたくない」と思ったことがあるか？ この女性は、そうでした。それは、彼女が大変不幸な結婚生活を繰り返していたからでした。それで彼女は、人の目を避けて生きていたのです。彼女はどんな気持ちで過ごしていたでしょうか。彼女の心は渴いており、井戸の水では心まで潤すことは出来ません。彼女の心には喜びがありませんでした。皆さんの心は今、どのような状態ですか。この女性のように渴いていませんか？

「生ける水」を与えるイエス様

イエス様は、この女性に「水を飲ませて下さい」と話しかけられました。当時、ユダヤ人とサマリヤ人は付き合いをしていませんでした。でも、イエス様はそのようなことはお構いなしに、女性に近づいていて行かれたのです。

皆さんはクラスの中で、嫌がられている友だちに話しかけていますか？ 「あいつと話す自分も仲間はずれにされる」と、みんなと一緒に無視してない？ イエス様はどのような人であっても親しく声をかけてく

ださる方なのです。

イエス様は、この女性と会った時、彼女には何が必要なのか分かりました。それは「生ける水」でした。イエス様は、「わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであらう」と言われました。

イエス様が与えてくださる「生ける水」とは、イエス様にある真の喜びです。そしてこの喜びは、決してなくなりません。イエス様は、私たちに失われない真の喜びを与えてくださいます。

「生ける水」を求めるサマリヤの女

この女性はイエス様に自分の夫のことを聞かれたことで、自分が罪深い者であることを自覚することができました。そして、自分のありのままの現状をイエス様に告白しました。罪は、イエス様からの喜びを妨げるものです。その罪を悔い改めるとき、イエス様は私たちに素晴らしい恵みを与えてくださいます。

女性は、生ける水の話聞いて終わったのではなく、「主よ、わたしがかわくことなく、また、ここにくみにこ

なくてもよいように、その水をわたしに下さい」とその水をイエス様に求めたのです。

たとえば、皆さんがマクドナルドに行ったとします。メニューには美味しそうな物がたくさんありますね。でも、店に行っただけではハンバーガーを食べることは出来ません。「ビッグマック・セットをください」と自分の欲しい物を、注文しないと食べることは出来ません。

イエス様は皆さんの心に、失われない喜び、あふれ出る喜びを与えてくださいます。そして、その喜びは変わることがないのです！

皆さんもサマリヤの女性のように自分の罪を素直に悔い改めて、生ける水を大胆に求めてください。

まとめ

イエス様がくださる喜びの水が心に満ちるなら、皆さんの顔は輝きます。そして、それが家族や友だちにあふれ流れて、周りの人々を幸せにして行くのです。ぜひ、イエス様を信じて、喜びにあふれさせて頂きましょう。

♪歌いつづけよう主のあいを♪（ホ77）

新しい生き方

ヨハネ 13:34

●教会の歩み

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

7月7日

獄吏と家族の
救い

使徒 16:25〜34

同 31 節

●預言者

7月14日

エリヤ①
生きて働かれ
る神

列王上 17:1〜16

同 1 節

21日

エリヤ②
火をもつて答
える神

列王上 18:20〜40

同 24 節

28日

エリシャ①
霊の二つの分

列王下 2:1〜15a

同 9 節

●キリストの宣教

9月1日
・ラリー
・デール

ダニエルとしし
ダニエル 6:1〜24

同 22 節

25日

エレミヤへの
召し

エレミヤ 1:1〜10

同 7 節

18日

神に背いたヨナ
ヨナ 1:1〜17

同 9 節

11日

ナアマン將軍
の癒し
列王下 5:1〜14

同 13 節

8月4日

エリシャ②
器と油

列王下 4:1〜7

同 3 節

【お詫びと訂正】二〇一九年度第1巻27頁「暗唱聖句」に
間違いがありました。

「誤」視認 ↓ 「正」死人 お詫びして訂正します。

おわりに

『牧羊者』二〇一九年度第Ⅱ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。巻頭言は千里聖三一教会の金井由嗣師に執筆していただきました。教師養成講座は同じく金井由嗣師が二〇一三年度第Ⅰ巻、Ⅱ巻に執筆してくださいました。今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

『牧羊者』のご購読・ご利用について

* 分級用に、ワークA(幼稚科向け)、B(主に小学生1～3年生向け)、C(主に小学生4～6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円+税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
<http://cs.jccj.info/>

* ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

聖書講解	研究資料	メッセージ例	ワーク(A)	ワーク(B)	ワーク(C)
石田高保師	高橋頼男師	松浦みち子師	鎌野 真師	山下大喜師	勝田幸恵師
宮澤清志師	金井由嗣師	中島啓一師	後藤 健一師	八幡直人師	上森恭子師
小泉 創師	鎌野善三師	飯田勝彦師	吉田美穂師	三輪直子師	野勢かほる師
福井文彦師	辻林和己師	土屋開夫師	宇野真佑美師	竹崎光則師	勝田幸恵師
	井上義実師				田中裕明師
					三輪正見師
					金田ゆり師
					松浦あん師
					佐藤 満師
					後藤栄子師
					松浦あん師
					加藤 満師
					多田豊子師
					加藤 清師
					中島啓一師

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。(中島啓一)

聖書教育教案誌 牧羊者 二〇一九年度 Ⅱ巻

二〇一九年七月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団 信託局 教会教育室
企画監修 日本イエス・キリスト教団 信託局 教会教育室
神戸市兵庫区塚本通三三三一九

印刷所 菱三印刷株式会社
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-5511
電話 (078) 575-5511

* 日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み